



「中央アジア＋日本」対話

日・中央アジア関係の今と未来を展望する

報告書



グローバル・フォーラム
The Global Forum of Japan (GFJ)

2017年8月31日（東京）

共 催

外務省

まえがき

グローバル・フォーラムは、世界と日本の間に各界横断の政策志向の知的対話を組織し、もって彼我の相互理解および合意形成に資することを目的として、毎年度各種の国際的交流ないし対話を実施している。

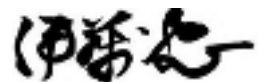
中央アジアは、古来シルクロードに通じた交流があり、これら5か国は大変日本に友好的で、豊富な天然資源と若年人口を有する将来性のある地域であるが、日本国内ではその重要性が十分に認識されていない。また、同地域はアジア、欧州、ロシア、中東を結ぶ地政学上の要衝に位置しており、国際情勢が急激に変容するなかで、同地域の地政学的重要性を改めて問い直し、日本の役割を模索することは、日本の外交戦略上極めて重要である。

このような問題意識に基づいて、グローバル・フォーラムは、外務省との共催により8月31日、東京において「中央アジア+日本」対話・第10回東京対話「日・中央アジア関係の今と未来を展望する」を開催した。当日は、中央アジア5カ国（ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン）より、グルバンムハメット・カシモフ・トルクメニスタン外務省特任大使、グロムジョン・ポボゾダ・タジキスタン共和国大統領府国際局長等に加え、日本側より伊藤憲一グローバル・フォーラム代表世話人、川口順子明治大学国際総合研究所フェロー／元外務大臣、宮家邦彦キヤノングローバル戦略研究所研究主幹などを含む総勢177名が出席した。

対話当日は、本年が日本と中央アジア各国との外交関係樹立25周年ということで、日本と中央アジア各国との関係の25年の軌跡を振り返りつつ、日・中央アジア関係の未来の展望について活発な意見交換が行われた。

なお、本報告書は、この「中央アジア+日本」対話の内容につき、その成果をグローバル・フォーラム・メンバー等各方面の関係者に報告するものである。また、本報告書の内容は、当フォーラムのホームページ（<http://www.gfj.jp>）上でもその全文を公開している。ご覧頂ければ幸いである。

平成29年10月20日
グローバル・フォーラム
代表世話人 伊藤 憲一





開幕挨拶を行う伊藤憲一 GFJ 代表世話人



200 名近い有識者・メディア参加者が参集（於：外務省「国際会議室」）

目 次

I 概 要

1. プログラム	1
2. 出席者名簿	2
3. 中央アジア 5 か国からの出席者の顔触れ	7
4. パネリスト発言要旨	8

II 速 記 録

1. オープニング・セッション	13
2. メインセッション	15
(1) プレゼンテーション	15
(2) パネルディスカッション	28
(3) 総括	41

III 付 録

1. 報告資料	43
2. 本「対話」に関するメディアなどの報道	59
3. グローバル・フォーラムについて	64

I 概 要

1. プログラム	1
2. 出席者名簿	2
3. 中央アジア 5 か国からの出席者の顔触れ	7
4. パネリスト発言要旨	8

1. プログラム

10:00-10:20	オープニング・セッション
●開 会 司会進行：田口精一郎（外務省欧州局中央アジア・コーカサス室長） ●挨拶 伊藤憲一（グローバル・フォーラム代表世話人） ●主催者基調スピーチ 堀井学（外務大臣政務官）	
10:20-13:10	メインセッション
ゲストスピーカーによるプレゼンテーション	
10:20-10:35 <日・中央アジア外交関係樹立 25 周年記念スピーチ> ・川口順子（明治大学国際総合研究所フェロー／元外務大臣） 10:35-11:10 <中央アジアと東アジア 2000 年の歴史> ・フレデリック・スター（アメリカ外交政策評議会中央アジア・コーカサス研究所所長）	
中央アジア側参加者による報告及びパネルディスカッション	
11:10-11:35 <中央アジア側によるプレゼンテーション>（各国 5 分程度の発表） ・グロムジョン・ボボゾーダ（タジキスタン：大統領府国際局長） ・サヤサット・ヌルベック（カザフスタン：アスタナ国際金融センター・マネージングディレクター） ・アザマト・ディカムバエフ（キルギス：国立戦略調査研究所所長） ・グルバンムハメット・カシモフ（トルクメニスタン：外務省特任大使） ・ムザファール・マドラヒーモフ（ウズベキスタン：外務省アジア太平洋局日本課長） 11:35-12:25 <今後の日本と中央アジアの関係を語るパネルディスカッション> モデレーター： 宇山智彦（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授） パネリスト： 中央アジア側 5 名（タジキスタン、カザフスタン、キルギス、トルクメニスタン、ウズベキスタン）日本側 3 名（宮家邦彦キヤノングローバル戦略研究所研究主幹、古宮健一郎・澤田ホールディングス（株）取締役、本間勝欧州復興開発銀行（EBRD）東京駐在員事務所長） 12:25-12:55 コメント、質疑・応答	
総 括	
12:55-13:05 相木俊宏（外務省中央アジア担当特別代表（大使））	
閉 会	
13:05-13:10 田口精一郎（外務省欧州局中央アジア・コーカサス室長）	
13:15-14:45	レセプション （於： 外務省新庁舎 7 階 ニコラスハウス）

2. 出席者名簿

<日本側発表者：9名>

田口精一郎（外務省欧州局中央アジア・コーカサス室長）
伊藤 憲一（グローバル・フォーラム代表世話人）
堀井 学（外務大臣政務官）
川口 順子（明治大学国際総合研究所フェロー／元外務大臣）
宇山 智彦（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授）
宮家 邦彦（キャノングローバル戦略研究所研究主幹）
古宮健一郎（澤田ホールディングス取締役）
本間 勝（欧州復興開発銀行(EBRD)東京駐在員事務所長）
相木 俊宏（外務省欧州局審議官・中央アジア担当特別代表（大使））

<中央アジアおよび米国側発表者：6名>

フレデリック・スター（アメリカ外交政策評議会中央アジア・コーカサス研究所所長）
グロムジョン・ボボゾダ（タジキスタン大統領府国際局長）
サヤサット・ヌルベック（カザフスタン・アスタナ国際金融センター・マネージングディレクター）
アザマト・ディカムバエフ（キルギス国立戦略調査研究所所長）
グルバンムハメット・カシモフ（トルクメニスタン外務省特任大使）
ムザファール・マドラヒーモフ（ウズベキスタン外務省アジア太平洋局日本課長）
(プログラム登場順)

<出席者：162名>

アイドス・ダルケノフ（駐日カザフスタン共和国大使館アタッシェ）
アイブン・シャガラコフ（中央アジア記者グループ（カザフスタン））
青木 淳平（丸紅株式会社電力・プラントグループ企画部グループ企画課担当課長）
青木 緑（NHK 報道局取材センター国際部記者）
秋葉 拓哉（無職）
浅井 信司（東京製綱株式会社海外エンジニアリング事業部海外営業部）
アジズ・ナザロフ（駐日タジキスタン共和国大使館二等書記官）
安保 愛（外務省欧州局中央アジア・コーカサス室総務班長調査班長）
荒金 啓志（クローネ）
アリーナ・サギンバエヴァ（中央アジア記者グループ（キルギス））
アンナグィルイジョウ（駐日トルクメニスタン大使館アタッシェ）
池尾 愛子（早稲田大学教授／グローバル・フォーラム有識者メンバー）
伊澤 遼子（株式会社双日総合研究所アナリスト）
石塚 和美（脚本家）
石山 南（大和速記情報センター速記者）
伊藤 潤平（三井化学株式会社経営企画部調査・渉外担当ダイレクター）

伊藤和歌子 (日本国際フォーラム主任研究員)
 伊藤 将憲 (日本国際フォーラム主任研究員)
 稲垣 文昭 (秋田大学大学院国際資源学研究科講師)
 稲本智佳子 (株式会社サイマル・インターナショナル通訳)
 井上 貴史 (三菱商事株式会社業務部中東・中央アジアチーム)
 井上 寛規 (株式会社中日本高速道路国際事業チームサブリーダー)
 岩崎 (通訳)
 岩田 猛 (ユーラシア旅行社)
 植田 隆子 (国際基督教大学教授／グローバル・フォーラム有識者メンバー)
 ウスモノフ・ファルフ (アジア人口・開発協会国際課主任研究員)
 ウスモン・マヒノーズ (千葉大学)
 ウランベック・アイヌーラ (株式会社 JTI)
 エルガシェフ・サンジャル (澤田ホールディングス株式会社)
 エルガシェフ・ファヒリディン (東京外国語大学修士2年)
 遠藤 克彦 (個人)
 大野翔太郎 (国際協力機構東・中央アジア部中央アジア・コーカサス課主任調査役)
 大前 明夫 (株式会社トーケミ顧問)
 大矢 実 (情報ソフト研究所技術営業部技術営業課)
 岡島 孝之 (情報ソフト研究所カメラマン)
 岡田光太郎 (富士通株式会社公共・地域営業グループグローバルビジネス統括部マネージャー)
 岡田 晃枝 (東京大学准教授)
 小倉 正広 (株式会社東芝産業政策渉外室担当部長)
 尾立 琴美 (東京大学)
 オラゾフ・イスラム (駐日トルクメニスタン大使館職員)
 改田 雅典 (元国際協力機構)
 笠井 嘉時 (行政書士)
 勝川 照夫 (グローバル・フォーラム事務局)
 加藤阿希子 (株式会社 IHI グローバルビジネス統括本部マーケティング部)
 加藤 資一 (日揮株式会社営業本部本部長スタッフ)
 兼盛 玉輝 (外務省欧州局中央アジア・コーカサス室研究調査員)
 川端 良子 (東京農工大学准教授)
 川辺 典子 (株式会社ワイヤアンドワイヤレス技術運用本部チーフ)
 菊地かおる (丸紅市場業務部欧州・CIS チーム課長補佐)
 菊池 誉名 (グローバル・フォーラム事務局)
 木佐森雅道 (神奈川県日本ユーラシア協会)
 岸 佑里子 (一般財団法人日本国際協力センターJICE 留学生事業第一部)
 日下部陽介 (国際交流基金企画部事業戦略課課長)
 隈部 兼作 (株式会社ロシア・ユーラシア政治経済ビジネス研究所代表取締役)
 小泉 光久 (株式会社日新ロシア CIS 室シニアアドバイザー)
 小杉 俊行 (伊藤忠商事株式会社)

河野 立哉 (株式会社双日プラントプロジェクト部)

小林 浩二 (日本電子輸出貿易管理室長)

ゴリブジョン・グロフ (駐日タジキスタン共和国大使館三等書記官)

齋藤 裕和 (三菱商事株式会社業務部中東・中央アジアチーム次長)

齋藤ベソツえく子 (株式会社サイマル・インターナショナル通訳)

齋藤 竜太 (筑波大学大学院生)

坂入 俊輔 (株式会社住友商事グローバル業務部主任)

桜井 正応 (株式会社日新国際営業第一部部長)

サディコフ・シャフルーフ (中央アジア記者グループ (ウズベキスタン))

佐藤 智伸 (富士通株式会社公共・地域営業グループグローバルビジネス統括部シニアマネージャー)

佐野 泰代 (富士通株式会社文教システム事業本部)

ザンドス・シェンバエフ (駐日カザフスタン大使館一等書記官)

ジェイムス・ハフマン (日本財団国際協力チーム)

塩谷 将 (株式会社三井物産戦略研究所研究員)

塩谷 崇守 (伊藤忠株式会社開発・調査部海外室 CIS エリアマネージャー)

重松 和英 (日本貿易振興機構アドバイザーロシア CIS 担当)

柴田 勉 (外務省欧州局中央アジア・コーカサス室事務官)

柴田 友子 (株式会社サイマル・インターナショナル通訳)

柴田 芳孝 (豊田通商株式会社海外地域統括部部長職)

清水 昭 (個人)

城 智子 (東京製綱株式会社海外エンジニアリング事業部海外営業部)

ジルディス・ナザーク (日露エコノミックセンター)

シロジ・アジゾフ (駐日ウズベキスタン大使館参事官 (政務担当))

杉浦 敏廣 (環日本海経済研究所共同研究員)

杉本 みほ (東京大学大学院医学系研究科講師)

鈴木 愛 (経済産業省通商政策局ロシア・中央アジア・コーカサス室)

鈴木 崇史 (独立行政法人国際協力機構東・中央アジア部中央アジア・コーカサス課)

鈴木 美勝 (外務省研修所研究指導員)

関 大樹 (株式会社 TBS テレビ報道局映像取材部)

先崎 将弘 (おいしい中央アジア協会)

ソンナム・チョデン (グローバル・フォーラム事務局インターン)

高岡進太郎 (セイノーロジックス株式会社営業部副部長)

高岡 主税 (外務省欧州局中央アジア・コーカサス室インターン)

高橋 智子 (外務省欧州局中央アジア・コーカサス室インターン)

高畑 洋平 (グローバル・フォーラム事務局長・有識者メンバー)

瀧澤 宏 (アジア・リサーチ・アンド・アドバイザリー・パートナー)

田口精一郎 (外務省欧州局中央アジア・コーカサス室長)

武村 翔貴 (株式会社ロシア・ユーラシア政治経済ビジネス研究所研究員)

田中あゆみ (独立行政法人国際協力機構東・中央アジア部中央アジア・コーカサス課)

田中 哲二 (中央アジア・コーカサス研究所所長)

田中 翔子 (グローバル・フォーラム事務局)
 谷口 肇 (国際協力機構東・中央アジア部中央アジア・コーカサス課長)
 タマヨ・ガーリー (株式会社富士通 SFDC ソリューション部)
 千葉 百子 (順天堂大学医学部客員教授)
 千原 直行 (一般社団法人海外インフラ研究協会)
 辻浦 慎二 (セイノーロジックス株式会社営業部課長代理)
 堤 佳晴 (東京製綱株式会社海外エンジニアリング事業部海外営業部)
 土井ゆかり (特定非営利活動法人カカオの木代表理事)
 ドウメイカインウー (DMK FOUNDATION 代表取締役社長)
 富樫 耕介 (東海大学教養学部国際学科講師)
 富 通夫 (国際通貨研究所上席客員研究員)
 富高恵津子 (株式会社富士通 SFDC ソリューション部長)
 豊田はる奈 (国際交流基金企画部文化事業部事業第2チーム)
 豊原 行宏 (イノヤール・プロジェクトリーダー)
 永井 章平 (丸紅株式会社市場事業部部長補佐)
 鳴海かさね (外務省欧州局中央アジア・コーカサス室インターン)
 成美 政樹 (独立行政法人国際協力機構業務調査員)
 西崎 邦夫 (キルギス国立農業大学名誉教授)
 橋本和華子 (一般財団法人日本国際協力センターJICE 留学生事業第一部)
 長谷川 直 (神奈川県日本ユーラシア協会)
 服部 貴紀 (大阪大学大学院)
 ババエフ・デイルショット (宏輝システムズ株式会社社員 (タジキスタン招聘者の息子))
 バヒリディノフ・マンスール (一般財団法人日本ウズベキスタン・シルクロード財団代表理事)
 林 隆男 (ライジングコンサルタンツ株式会社代表取締役)
 平岩貴比古 (時事通信社外信部記者)
 平川 真淳 (双日株式会社執行役員)
 平野 礼子 (日本貿易振興機構)
 ファルフ・ウスモノフ (公益財団法人アジア人工・開発協会国際課主任・研究員)
 ファトゥヒッディン・マイゾフ (中央アジア記者グループ (タジキスタン))
 福島安紀子 (青山学院大学教授)
 福田信一郎 (国際協力機構帰国専門家連絡会かながわ理事長)
 藤井 康彰 (株式会社丸紅タシケント出張所所長)
 藤田 研二 (株式会社ドーワテクノス海外営業推進部)
 藤巻 裕之 (東海大学准教授グローバル推進本部長)
 フルシド・ハイダロフ (駐日ウズベキスタン大使館参事官 (貿易経済担当))
 古屋 桃子 (慶應義塾大学)
 古屋 裕生 (千葉大学)
 星 安寿沙 (ビターズ・エンド)
 細川 良一 (ABB 株式会社営業統括本部長)
 堀江 良城 (外務省欧州局中央アジア・コーカサス室事務官)

松尾 俊幸 (エモック・エンタープライズ営業部海外室)
松岡 承子 (国際協力機構東・中央アジア部中央アジア・コーカサス課専門嘱託)
松嶋 希会 (アンダーソン・毛利・友常法律事務所ロシア CIS デスク・アソシエイト弁護士)
マフムドフ・ウミド (法政大学政治学研究科博士後期課程)
マラットベク・モルダリエフ (駐日キルギス共和国大使館三等書記官)
水野 綾 (通訳)
水野 祐子 (国際協力機構研修監理官)
三谷 佳子 (株式会社東横インホテル企画開発)
満永 有美 (国際協力機構東・中央アジア部中央アジア・コーカサス課)
武藤 優子 (経済産業省通商政策局ロシア・中央アジア・コーカサス室)
室谷 陽太 (株式会社 TBS テレビ報道局映像取材部)
森 弘一郎 (個人)
森 彩実 (ロシア NIS 貿易会ロシア NIS 経済研究所研究員)
森藤 智 (個人)
矢島 隆志 (日露エコノミックスセンター代表)
矢野 卓也 (日本国際フォーラム研究センター長)
山崎 友美 (国際交流基金企画部事業戦略課上級主任)
山下 勇輝 (豊田通商株式会社海外地域統括部振興地域戦略室)
山澄 充則 (株式会社トーケミ外国部営業推進室室長)
山田有佐子 (株式会社ユーシン担当)
山田 健斗 (外務省欧州局中央アジア・コーカサス室事務官)
山田 喜之 (日本郵船株式会社調査グループ)
横井 弘海 (時事通信社特約記者)
吉田 直正 (宏輝システムズ株式会社代表取締役社長)
依田 和人 (株式会社日新国際営業第一部ロシア・CIS 室課長)
渡邊 啓貴 (東京外国語大学教授／グローバル・フォーラム有識者メンバー)
渡辺 繭 (グローバル・フォーラム常任世話人)

(名字五十音順)

3. 中央アジア 5 か国からの出席者の顔触れ

<タジキスタン>

グロムジョン・ボボゾーダ（タジキスタン共和国大統領府国際局長）

大統領府国際局長として外交政策調整に携わる同氏は、長年日本との関係発展に尽力し、2009 年から 2015 年までは駐日特命全権大使を務めた。また、経済博士号を有し、政府内随一のエコノミストとして経済関係省庁の要職を歴任した経験から、日本を含む当国の外交政策を大きな視点で支えている。

<カザフスタン>

サヤサット・ヌルベック（カザフスタン・アスタナ国際金融センター・マネージングディレクター）

著名な政治・国際関係アナリストで、現在はナザルバエフ大統領の指示の下で設立されたアスタナ国際金融センターの幹部として外国との協力に取り組む同氏は、次世代のリーダーとして注目されている。米大学を卒業後、大統領府をはじめ、中央及び地方行政・国営企業の幹部級ポストを歴任したほか、地元セメイで実施された日本の ODA 事業では現地コーディネーターを務めた経験を持つ。

<キルギス>

アザマト・ディカムバエフ（キルギス国立戦略調査研究所所長）

政府直轄の国立戦略調査研究所の所長を務める同氏は、1990 年後半より財務省、首相府、大統領府等で経済関連の役職を歴任した一方、海外企業での勤務経験もあり、独立後のキルギス経済に関して豊富な見識を有している。また、文科省のヤング・リーダーズ・プログラムにて政策研究大学院を卒業するなど日本との経済関係にも精通している。

<トルクメニスタン>

グルバンムハメット・カシモフ（トルクメニスタン外務省特任大使）

トルクメニスタン外務省の特命大使として情報分析を担当する同氏は、1993 年に副首相に就任し、その後も国防大臣、法務大臣を歴任したことから、当国の政策・方針等について幅広い知識を有する。また、駐中国特命全権大使、アジア大洋州局参事官を勤めた経験から東アジア地域にも造詣が深く、今後の二国間関係の進展、さらには日本と中央アジア諸国の関係強化について様々な提言を行う。

<ウズベキスタン>

ムザファール・マドラヒーモフ（ウズベキスタン外務省アジア太平洋局日本課長）

外務省アジア太平洋局日本課長に着任した同氏は、2004 年から 2007 年に駐日ウズベキスタン大使館での勤務経験があり、日・ウズベキスタン関係の歩みに精通している。また、在米国大使館での勤務や国連大使を務めた経験から、西側諸国の価値観も熟知しており、日・ウズベキスタン関係について多角的な視点と豊富な見識を持つ。

（プログラム登場順）

4. パネリスト発言要旨

(1) オープニング・セッション

(イ) 挨拶

伊藤 憲一 グローバル・フォーラム代表世話人

冷戦時代、中央アジアが鉄のカーテンの向こう側にあり、西側世界の住民にとって近寄りがたい国々であったころ、私は約1カ月をかけて、ひとりで中央アジア5カ国を全て訪ねた。当時私はモスクワの日本大使館で、研修期間中の大使館員として、アルマータを皮切りに、フルンゼ、デュシャンベ、タシュケント、ブハラ、サマルカンド、アシハバードなどの諸都市を歴訪した。いずれの都市も、中心のストリートはマルクス・レーニン通りと名づけられていたのが印象的であった。当時は身の安全を守るために、必ずグループで行動すべきところ、私はロシア語ができたので、単独で1カ月近く、いわばほっつき歩いた記憶がある。この旅行を通じて、中央アジア諸国にはそれなりの、ロシアとは違う独特の伝統、文化、人情があることを現地で実感した。また、私が会長をしている外交問題シンクタンク、日本国際フォーラムでは、これまで10人近い中央アジアの青年たちを客員研究員として迎え、彼らと国際情勢を議論した。中央アジアが世界を見る眺望台の一つであることは間違いない。

(ロ) 基調スピーチ

堀井 学 外務大臣政務官

本年、日本と中央アジア諸国との外交関係は25周年を迎えた。その間、我が国は中央アジアの開かれた、安定し自律的な発展を支え、地域の平和と安定に寄与することを基本方針とし、(a) 二国間関係の抜本的強化、(b) 「中央アジア+日本」対話を通じた地域共通の課題への関与、(c) グローバルな舞台での一層の協力を3本柱として、中央アジア外交を推進してきた。そのような中、一昨年、安倍総理が日本の総理大臣として初めて中央アジア5カ国を歴訪し、日本と中央アジア各国との関係は新たな次元に引き上げられた。本年5月にはトルクメニスタンで「中央アジア+日本」対話、第6回外相会合が開催され、共同声明が採択された。また、本年タジキスタンが「中央アジア+日本」対話の議長国に就任し、中央アジアと日本の6カ国全てが議長国を務めることになる。その他にも、政治、経済、文化、スポーツ、教育といったさまざまな分野での交流も活発に行われている。我が国として今後とも、さきに述べた基本方針を堅持しつつ、中央アジア外交を積極的に進めていく所存である。

(2) メインセッション

(イ) プレゼンテーション

(a) 川口 順子 明治大学国際総合研究所フェロー

過去何千年の歴史を振り返ると、我々は、中央アジアを舞台として多くの国々が戦ってきたということに気づかされる。ロシア人がタタールのくびきと名づけたモンゴル人が制覇をした時期、グレートゲームといって英国とロシアの間で権益を争った時期がそれである。また、ソ連邦崩壊までの間は、中央アジアはソ連邦の一部であった。中央アジアは資源・エネルギーに富んでおり、今後とも、中央アジアを舞台として各国が影響力を行使するであろう。その意味において、今後、中央アジアが特定

の国の覇権の下にあるのではなく、自律して、世界的に重要な国として、平和裏に発展していくことが重要である。もう一つは、経済問題である。中央アジアの平和・安定は、経済の順調な発展と表裏一体である。かつて日本も、人的資源以外は資源のない国であり、苦勞に苦勞を重ねて経済発展をしてきた。しかし、日本が経済発展をした時代と今日における大きな違いは、それ以降、多くの国々が独立をして、競争がより厳しくなっていることである。経済発展は、規模の利益を享受できるということが非常に重要であり、地域の国々との協力関係が必要不可欠である。水、交通網、環境問題、麻薬の撲滅等、一国で取り組むよりは、地域の国が協力して取り組むことによって、より大きな利益を獲得することができるかと私は信じている。

(b) フレデリック・スター アメリカ外交政策評議会中央アジア・コーカサス研究所所長

2004年に日本が「中央アジア+日本」というイニシアティブを確立したが、強調すべきことは、これが「日本+中央アジア」対話ではなく、「中央アジア+日本」対話であることである。このイニシアティブを実践するに当たり、日本は新しい中央アジアの国々を、単に諸国家の集まりとしてではなく、1つの地域単位として注目した最初の国である。意外にも日本と中央アジアの関係は歴史が長く、古くは11世紀、中央アジアに存在したカラハン朝の学者であるマフムード・カーシュガリー氏の研究成果の一つの地図に日本列島が載っていたほか、聖武天皇が集めて正倉院に収めた至宝の中には、中央アジアから集めたもの（フレスコ画など）が数多く現存している。その他、日本への仏教伝来は中国からではなく、中央アジア、そしてアフガニスタンから伝来したこと、さらには、シルクロードを開き、管理したのは、中国人ではなく現在のウズベキスタンなどに住んでいたソグド人と呼ばれる民族であったことはあまり知られていない。我々の世代の大きな課題の一つに、中国と欧州間の輸送路の開拓があったが、次世代の課題としては、従来の輸送路に加え、成長著しいインドを含めた包括的な輸送路の確保であるといえる。

(ロ) パネルディスカッション (モデレーター：宇山智彦北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授)

(a) グロムジョン・ボボゾダ タジキスタン大統領府国際局長

今年、日本とタジキスタンは外交関係樹立25周年になる。両国関係は、2015年の「日本国とタジキスタン共和国との間の新たなパートナーシップに関する共同声明」が採択され、その後順調に成長してきた。しかしながら、これまで日本からタジキスタンへの支援は、専ら技術協力に重点が置かれ、両国のポテンシャルを十分に生かし切れてこなかった面がある。世界銀行によると、2017年から2019年の間にタジキスタンの経済成長率は5.8%になるほか、2017年にはこの地域の人口は1,700万人を超えると予測されている。その意味において、この「中央アジア+日本」対話という枠組みは、二国間関係だけではなく、地域統合に関する問題を話し合う良い場である。また、我々はアフガニスタンの平和と安定にも関心を抱いている。アフガニスタンの安定のためには、同国の国民の生活水準を上げることが急務である。現在、タジキスタンの電力をアフガニスタンなどに送る「CASA-1000」プロジェクトが進行中である。過激主義、国際テロ、あるいは麻薬や武器の密輸などが蔓延しているが、こうした問題を解決するためにも、今後各国と緊密に連携を取る必要がある。

(b) サヤサット・ヌルベック カザフスタン・アスタナ国際金融センター・マネージングディレクター

この 25 年間、日本とカザフスタンはさまざまな分野で協力関係を進めてきた。とりわけ、政治経済、先端技術分野においての協力は著しく、両国がこれまでに結んだ協定文書は 44 件以上にのぼる。現在カザフスタンでは、50 以上の日本資本の入った会社が多種多様な分野（エネルギー、鉱山採掘業、原子力エネルギー分野など）で業務を展開している。1993 年 12 月にカザフスタン・日本経済官民合同協議会が立ち上げられ、2005 年から 2015 年の 10 年間で、日本からカザフスタンへの直接投資の額は累計で 62 億ドルとなった。また、カザフスタンは 2015 年には、「国家の計画：100 具体的な手順」の実現に向けて動き出し、2017 年には私の所属するアスタナ国際金融センターが開設された。同センターは、ドバイの金融センターをモデルとし、外国人審査員の参加を得て手続において英国法と英語の言語を使用する。さらに、同センターでは税制優遇（50 年にわたり法人税、個人所得税、土地税、資産税が免税）のほか、賃借料が 2 年間無料ということもあり、丸紅、東芝といった日本の有名企業が関心を示している。

(c) アザマト・ディカムバエフ キルギス国立戦略調査研究所所長

25 年前、キルギスタンは独立国家となり、その名称を「キルギス」に変更した。新生キルギスと最初に外交関係を樹立したのが日本である。1993 年から 2003 年の間、日本は ODA を通じてキルギスの運輸、特に交通セクターのインフラ整備の支援を行い、キルギス最大の支援国となった。しかし、2000 年以降、キルギス国内での汚職の問題や、武装勢力による日本人人質事件なども相まって、両国の経済協力が停滞した時期もあった。こうした中、両国の協力関係において重要な役割を担ったのが、2013 年から 2015 年にかけてのハイレベルな交流であった。2007 年のバキエフ・キルギス共和国大統領の日本公式訪問をはじめ、両国外務大臣の相互訪問、また、エポックメイキングとしては、2015 年、安倍総理大臣のキルギス初訪問などがあげられる。中央アジアの地域協力において、しばしば「中央アジアとは何か」という問題が見え隠れする。と言うのも、各分野（経済、文化、安全保障、インフラ、統治のあり方など）によって、地域統合のあり方、中央アジアとは何か、という問いに対する答えが異なる。現在、ロシアは「ユーラシア経済連合」を、中国は「一帯一路」構想をそれぞれ推し進めており、いずれも中央アジアにとって無縁とは言えず、今後これらにどう取り組んでいくのか、真剣に考えなければならない。

(d) グルバンムハメット・カシモフ トルクメニスタン外務省特任大使

近年、両国関係は様々な分野において発展してきている。とりわけ両国関係の中で、主要な分野の一つにエネルギー分野がある。同分野には日本企業も参画し、その先端技術を導入することによって、トルクメンバシの石油精製工場の大規模な近代化が行われた。この他、日本企業の川崎重工や東洋エンジニアリングが参加し、2つのハイテクプロジェクトが天然ガス加工分野で行われており、その総額は 50 億ドルを超えている。さらに、同プロジェクトでは、トルクメニスタンの Owadan-Depe 地区にて GTL（Gas to Liquids）プラントの建設に加え、トルクメニスタン国営ガス会社向けの大型ガス化学コンプレックスがキアンリに建設されることが予定されている。本年 5 月 1 日にはトルクメニスタンにおいて、「中央アジア+日本」の第 6 回外相会合が開催された。同会合において、トルクメニスタンは中央アジア地域におけるグローバルなトランジット輸送回廊の構築を含むイニシアティブを発表した。我々は、今後も、本対話の枠組みを通じて、中央アジア地域のみならず、日本との二国間関係を新たな次元に引き上げていきたい。

(e) ムザファール・マドラヒーモフ ウズベキスタン外務省アジア太平洋局日本課長

2015 年 10 月に、日本の安倍総理大臣がウズベキスタンを訪問されて以降、両国の協力関係は多面的かつ互恵的なものとなっている。議会間の交流も活発で、日本では日本ウズベキスタン友好議員連盟が組織されたほか、ウズベキスタンの国民議会には、議会交流のための日本グループもある。ウズベキスタンは日本の外交政策を一貫して支持している。両国は、地域や国際社会の多くの重要な課題で認識が一致している。例えば、国連改革、大量殺戮兵器の不拡散、安全保障、テロとの戦い、過激主義や不法な麻薬取引との戦いなどである。また、ウズベキスタンは日本の国連安全保障理事会の常任理事国入りも支持している。両国関係の重要なメカニズムの一つに、「中央アジア+日本」対話がある。ウズベキスタンにとって、同会議に参加することは、運輸分野の協力や技術の導入のほか、様々な自然災害に対する日本の技術などを学ぶ重要な機会となっている。今後の両国関係を発展させるためには、(i) 本対話の枠組みを維持・発展させる、(ii) 日本企業との間での協力分野（エネルギー、石油、ガス、ケミカル、薬など）を増やす、(iii) 両国における大学間の交流を発展させる、などを行うことが重要である。

(f) 宮家 邦彦 キヤノングローバル戦略研究所研究主幹

ユーラシア大陸には、ロシア、中国、イスラム、という 3 つの現状変更勢力になり得るものがある。この 3 つを同時に抱えているのは中央アジアだけであり、その意味で、今後、中央アジア地域で大きな変化が起こるのではないかと。日本は政治的に重要な地域であるが、常に善意であって野心がなく、そして文化的に脅威とならない存在であり続けるパートナーである。中央アジア側への質問としては、(i) この地域、特に私が関心のあるイスラムの将来をどのように各国で見ているのか、(ii) 中国の動向をどのように見ているのか、である。

(g) 古宮健一郎 澤田ホールディングス取締役

キルギスの最大の魅力は「人」である。同国は非常に資源の少ない国だが、学校の数が人口に比べて非常に多く、600 万人の人口で 50 校の大学、240 校近い専門学校がある。また、親日国であるほか、教育レベルも非常に高い国である。さらに、給与水準が低いので、投資効率が高いといえる。今後、現地の銀行などと協力して、キルギスの発展のために尽力したい。

(h) 本間 勝 欧州復興開発銀行東京駐在員事務所長

現在、中央アジアでは、中国の「一帯一路」政策や AIIB や、ロシアの「ユーラシア経済共同体」などの周辺大国の動きなどもあって、大きな変化に直面している。また、中央アジアの人口の半分を占めるウズベキスタンについていえば、カリモフ大統領が亡くなって約 1 年が経過したが、同国の変革のスピード感は増してきている。同国の基本政策は、近隣国との関係改善、対外開放、民間セクターの育成等が中心となっているが、さらに為替統一の気運も高まりつつあり、これが非常に大きなモメンタムになるだろう（（注）9 月上旬に統一）。その中で、同国の投資対象としては、観光、アグリビジネス、繊維、金融、電力、鉱業などの分野に将来性があると考えられる。

(ハ) 統括

相木 俊宏 外務省中央アジア担当特別代表（大使）

本日の議論では、中央アジア各国が、経済面、人材育成面、政治面などにおいて着実に発展を遂げてきた中、中央アジア諸国間の地域協力の意義や可能性の高まりに加え、ロシア、中国、EU、アメリカ、インドといったさまざまな域外パートナーとの関係が議論された。そのような域外パートナーの一つとして、日本があるわけだが、日本と中央アジアの協力のあり方については、両者の長い歴史的な関係や背景の中で発展させていくことが重要であろう。具体的な協力分野としては、ビジネス面での投資や ODA などを含めた経済分野での協力に加え、文化面、ソフトパワーの重要性なども活用の余地があるだろう。外務省としても、日本と中央アジアの関係が今後さらに発展するために、その役割を果たしていきたい。

（文責在、事務局）

Ⅱ 速 記 録

1. オープニング・セッション	13
2. メインセッション	15
(1) プレゼンテーション	15
(2) パネルディスカッション	28
(3) 総括	41

1. オープニング・セッション

田口精一郎(司会) 中央アジア各国及び日本からの参加者の皆様、また多くのご来場の皆様、本日は雨の中、まことにありがとうございます。本日司会進行を務めます外務省欧州局中央アジア・コーカサス室長の田口と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、この会場の定員を超える申し込みをいただきまして、満員となっております。大変ありがとうございます。

それでは、これより「中央アジア+日本」対話・第10回東京対話を開会いたします。なお、既にご案内しておりますとおり、本日は日本語とロシア語の同時通訳となっておりますので、受付で配付した同時通訳レシーバーをご使用いただければと思います。

また、本日の通訳は、柴田友子さん、斎藤ベントさん、稲本智佳子さんの3名でございます。

まず初めに、本日の対話を外務省とともに共催いただいておりますグローバル・フォーラム代表世話人でいらっしゃいます伊藤憲一様にご挨拶いただければと思います。

伊藤様、よろしくお願いいたします。(拍手)

伊藤憲一(グローバル・フォーラム代表世話人) 皆さん、こんにちは。グローバル・フォーラム代表世話人の伊藤憲一でございます。グローバル・フォーラムにとっては2015年に続き、再び「中央アジア+日本」の対話を外務省との共催により開催することができ、大変喜んでおります。中央アジア5カ国と米国からご参加をいただいたパネリストの皆様には、心から改めて歓迎の意を表したいと思います。

さて、冷戦時代、中央アジアが鉄のカーテンの向こう側にあって、我々西側世界の住民にとって近寄りた国々であったところ、私は約1カ月をかけて、ひとりで中央アジア5カ国を全て訪ねたことがあります。今から半世紀以上昔の1963年のことでした。当時私はモスクワの日本大使館で、外交官補というか、研修期間中の大使館員でありまして、大使から勉強のため中央アジアを見てきなさいと言われて

て、アルマータを皮切りに、フルンゼ、デュシャンベ、タシュケント、ブハラ、サマルカンド、アシハバードなどの諸都市を歴訪しました。今では多くの都市の名前が変わってきておりますのも、昔を知る者の感慨でございます。いずれの都市も、中心のストリートはマルクス・レーニン通りと名づけられていたのが印象的でした。

当時は冷戦時代真っただ中でありまして、西側大使館員がソ連国内を旅行するときは――当時はソ連、ソ連と言いなれていて、ロシアというのはほとんど使われることがなかったことも思い出されます――身の安全を守るために、必ず何人かでグループをつくって行動をともしましたが、私は単独で1カ月近く、いわばほつき歩いたわけで、これには私を尾行して観察していたソ連のKGBがびっくりして、大体すぐ意味がわかったようで、以後はむしろ私を接待してくれる、食事に呼んでくれたりするような関係にまでなったわけですが、当時私はまだ25歳でした。

ロシア語ができましたので、この旅行ではすぐ現地の人たちと友達になり、家に連れていかれて食事までごちそうになったこともありました。モスクワに行ったら会おうよなどと言ってくれたのですが、そちらのほうは私が現地を離れるなり、ぱったりと連絡はつかなくなったのが記憶にございます。しかし、中央アジア諸国にはそれなりの、ロシアとは違う独特の伝統、文化、人情のあることも現地で実感した次第であります。

ということで、中央アジアは私にとって格別に思い入れのある場所なのですが、その後、切れていたご縁が復活していることをご報告して、私の挨拶の締めくくりとしたいと思います。というのは、ソ連解体の後、私が会長をしている外交問題シンクタンク、日本国際フォーラムは、10人近い中央アジアの青年たちを客員研究員としてお迎えするご縁を得たからであります。彼らと国際情勢を議論し、むしろ教えられることが多かったのは、意外な、しかしよ

く考えてみれば当然のことでした。中央アジアが世界を見る眺望台の一つであることは間違いありません。

今日は日本と中央アジア各国との外交関係樹立の25年の軌跡を振り返りつつ、この対話を1つの契機として、両国関係が一層発展することを祈念してやみません。

以上、開会のご挨拶とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

田口精一郎(司会) 伊藤様、ありがとうございました。

続きまして、堀井学外務大臣政務官に基調スピーチをお願いいたします。

政務官、よろしくお願いいたします。

堀井学(外務大臣政務官) 皆さん、おはようございます。「中央アジア+日本」対話・第10回東京対話の開催に当たり、外務省を代表いたしまして、中央アジア各国の参加者の皆様、心からご歓迎を申し上げます。また、ゲストスピーカーの川口順子・元外務大臣、フレデリック・スター・アメリカ外交政策評議会中央アジア・コーカサス研究所長、並びに日本側発表者の皆様、そして会合開催にご協力いただいた関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。本日はこのように多くの方々にお集まりをいただき、主催者として大変うれしく思っております。

我が国は2004年に、中央アジアの地域協力を促進し、日本がその触媒の役割を果たすべく、本日ゲストスピーカーとしてお越しにいただいている当時の川口外務大臣のイニシアティブのもと、「中央アジア+日本」対話を立ち上げました。その一環として、公開シンポジウム型の東京対話を実施し、今回10回目となりました。今回はこのような四半世紀の節目を迎えた我が国と中央アジア諸国との関係を振り返るとともに、今と未来を展望し、今後の一層の友好協力関係を高めていきたいと思っております。

我が国の中央アジア外交は、大きな節目を迎えています。本年、日本と中央アジア諸国との外交関係は25周年を迎えました。その間、我が国は中央アジアの開かれた、安定し自律的な発展を支え、地域

の平和と安定に寄与することを基本方針とし、1つ、二国間関係の抜本的強化、2つ、「中央アジア+日本」対話を通じた地域共通の課題への関与、3つ、グローバルな舞台での一層の協力を3本柱として、中央アジア外交を推進してまいりました。

そのような中、一昨年、安倍総理が日本の総理大臣として初めて中央アジア5カ国を歴訪し、日本と中央アジア各国との関係は新たな次元に引き上げられました。その後、総理訪問の際に達成されたさまざまな合意事項のフォローアップが各方面で活発に行われております。本年5月にはトルクメニスタンで「中央アジア+日本」対話・第6回外相会合が成功裏に開催され、共同声明が採択をされました。また、本年タジキスタンが「中央アジア+日本」対話の議長国に就任し、これまで中央アジアと日本の6カ国全てが議長国を務めたこととなります。

そのほかにも、政治、経済、文化、スポーツ、教育といったさまざまな分野での交流も活発に行われております。我が国として今後とも、さきに述べた基本方針を堅持しつつ、中央アジア外交を積極的に進めていく考えであります。

昨年の東京対話では、日本における中央アジアの認知度を抜本的に高めることを目的として、映画祭、音楽祭、駐日大使館訪問等のサイドイベントも実施をいたしました。本年も、1人でも多くの方々に中央アジアに関心を持っていただけるように、各種サイドイベントを企画させていただきました。

まず、先日外務省で、中央アジアを舞台にした森薫さんの漫画作品、「乙嫁語り」の原画展を開催いたしました。また、中央アジアの代表的な料理をご家庭で手軽につくれるよう、レシピ動画を作成してYouTubeの外務省チャンネルで配信をしております。さらに、森薫さんに全7話の書きおろし漫画、「中央アジアクッキング」を制作いただきました。こちらも外務省ホームページに順次掲載をしております。いずれにしても初めての試みではありますが、漫画や料理という切り口から、より多くの方々に中央アジアの魅力に触れていただけたらと思います。この場をおかりして、企画趣旨にご賛同いただいた多くの

関係者の皆様のご支援とご協力に、心から感謝を申し上げます。

本日の公開シンポジウムの後のレセプションでは、中央アジア料理もご用意をさせていただいております。サイドイベントとして作成したレシピ動画を参考に、皆様のご家庭などでもお試しください、お気に召されましたら、ご家族やご友人など身近な方々にもご紹介をいただければと思います。料理を通じて皆様方に中央アジアの文化の一端に触れていただき、現地の味をお楽しみいただけるきっかけとなれば幸いです。

本日の会合を含む一連のイベントを通じ、1人でも多くの日本人にとって、中央アジアがより親しみのある身近な存在になることを願っております。外交関係25周年を迎えた我が国と中央アジア各国との関係が、次の四半世紀ますますダイナミックに展開していくことを祈念しつつ、私からの挨拶とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

田口精一郎（司会） 堀井政務官、ありがとうございました。

それでは、メインセッションに移らせていただきます。まずは、現在明治大学国際総合研究所フェローをされており、外務大臣ご在任中に「中央アジア+日本」対話を立ち上げられた川口順子様より、日本・中央アジア外交関係樹立25周年を記念するスピーチをいただきます。よろしくお願いいたします。

2. メインセッション

（1）プレゼンテーション

川口順子（明治大学国際総合研究所フェロー／元外務大臣） 堀井政務官、中央アジア各国からおいでの皆様、ご来場の皆様、本日、日本と中央アジアの国交樹立25周年に当たる今年の「中央アジア+日本」対話、第10回東京対話においてスピーチをさせていただく機会をいただきましたことを、大変に光栄に存じております。

先ほどお話がございましたけれども、私が外務大

臣を務めさせていただいたのは2000年代の初めのころ、今から10年以上前のことでございました。そのときに、この「中央アジア+日本」対話の枠組みを立ち上げたわけでございますけれども、その直接のきっかけは幾つかございました。

1つは、今日もご来場なさっていらっしゃいますけれども、前にキルギス大統領の顧問をなさった田中さんが私のところを訪ねてくださいます、中央アジアの実情についてお話を下さいました。大変に興味深く、日本として何ができるかということを考えさせられました。そのときにいただいたキルギスのマナス大王とお妃様の小さなお人形がありまして、これが日本のこけし人形にそっくりで、文化の類似性を感じさせるところもありまして、私は今も大変大事にしております。

この中央アジアと日本が一緒に何ができるかという構想については、その後お会いした一部の中央アジアの国々の外務大臣とはお話をさせていただき、おおむねご賛同をいただきました。ただ、中央アジア5カ国の外務大臣と日本の外務大臣が一堂に会するというのは、時間的に容易なことではありませんで、どのように、いつスタートをさせるかということが大きな問題でございました。

その問題を解消してくださったのが、カザフスタンの当時外務大臣をしていらしたトカエフ外務大臣でございました。場所は中国の青島でしたけれども、当時行われていた、あるいは今も行われているかもしれませんが、アジア協力対話という枠組みがありまして、そのリトリートの会合で、英語のアルファベット順に席がありました。ジャパン、日本のJの次がK、カザフスタンでありまして、テーブルもない大きな安楽椅子に順番に座っていたのですが、難しい議論の最中に、突然隣のトカエフ外務大臣からメモが来ました。

何かと思って見てみましたら、英語で、あなたの名前を漢字でどうやって書くんだという質問がありました。これはよく言われることなので、川口順子と書いて彼に返しましたら、直ちに川口順子と漢字で下に書かれて、紙が戻ってきました。外務大臣が

何か学生みたいなことをやっていると思われるかもしれませんが、時々そういう息抜きもいたすわけでございますけれども、それで聞きましたら、それまで私は知らなかったんですが、トカエフ外務大臣は中国語の専門家でいらっしゃるそうで、中国語がおできになる方であれば漢字が書けるのは当然ということで、それからすっかり打ち解けて、お話ができる関係になりました。

そこで休憩時間に、そのタイミングのお話を相談いたしましたら、トカエフ外務大臣から、これは2004年のことですが、8月にカザフスタンで中央アジア協力機構（CACO）という中央アジアの外務大臣の会合が開かれるから、その直前か直後に開くということではどうか、自分がほかの外務大臣に話をするとおっしゃっていただきまして、まさにこれで立ち上がることになったということです。ですから、私は初めから、このプロジェクトはともに立ち上げた、パートナーシップを持って中央アジアの国々と日本が一緒になって立ち上げた枠組みであるということを強く感じております。

私がこの枠組みを立ち上げたいと思った理由は幾つかあります。まず、これは日本の皆様には申し上げるまでもないことですが、中央アジア、シルクロード、西域といった言葉は、私たち日本人には多くの思いをもたらす言葉であります。また田中さんの言葉をかりると、遺伝子がうづく言葉だと思います。仏教や、技術的にすぐれた文物、楽器などが、シルクロードを経て日本に入り、当時の日本を大きく刺激いたしました。

そういったことを背景に、何といても最大の大事な理由は、中央アジアが世界の平和と安定に果たしている役割の重要性でございます。当時、世界の平和と安定について、幾つかの大きな問題がありました。9・11、アフガニスタンに見るように、イスラム過激派の動きがございました。また、イラクの復興もなかなか進まずに、宗派間の争いやテロが続いておりました。中東和平もずっと超弩級の問題でし、イランの核開発問題も大きな問題でした。

外務大臣としてそれらの問題に取り組む中で、

ユーラシア大陸のど真ん中にある中央アジアの地域が平和で安定しているということが、もちろん中央アジアにとっても、そして日本にとっても世界にとっても、極めて重要だということを身にしみて感じたわけでございます。この中央アジアの地域をテロの温床にしてはいけないし、地域紛争の場にしてはいけないと思いました。

過去何千年の歴史を振り返ってみると、私たちは、中央アジアを舞台として多くの国々が戦ってきたということに気づかされます。ロシア人がタタールのくびきと名づけたモンゴル人が制覇をした時期もございましたし、グレートゲームといって英国とロシアの間で権益を争った時期もありました。ソ連邦崩壊までの間は、中央アジアはソ連邦の一部になっていました。

今後、過去とは違う形になると思いますけれども、中央アジアを舞台として各国が影響力を持とうとするということが起こる可能性があります。特に、中央アジアは資源・エネルギーに富んでいるという観点で、重要度が増してきています。まさに中央アジア自身にとっても世界にとっても日本にとっても、中央アジアが特定の国の覇権のもとにあるのではなくて、自律して、世界的に重要な国として、平和裏に発展をしていくという存在であることが重要だと思います。

また、もう一つ、経済の問題があります。中央アジアの平和・安定は、経済の順調な発展と表裏一体です。これは、発展をしているどの国を見ても言えることです。当時はソ連邦が崩壊をして約10年近くたった時点でしたので、市場経済になれていない国々、特に資源に恵まれていない国々が国づくりをしていくというのは、大変困難な道筋でありました。かつて日本も、人的資源以外は資源のない国でございましたから、苦労に苦労を重ねて経済発展をしてきたという歴史があります。

しかし、この2000年代の初めの時点で、日本が経済発展をした1960年代と大きく違う点は、それ以降多くの国が独立をして、経済発展をしようとみんな試みている、競争がより厳しくなっていること

です。経済発展というのは、規模の利益を享受できるということが非常に大事なことです。したがって、地域の国々の協力関係ということも重要になります。水、交通網、環境問題、麻薬の撲滅等々、ほかにもたくさんありますけれども、一国で取り組むよりは、地域の国が協力をして取り組むことによって、より大きな利益を獲得することができるだろうと私は考えました。

日本は、それまで中央アジアの国々、それぞれの国に対して支援を行ってきました。ただ、それだけではなくて、地域の国々相互の連携した努力を支援するということによって、地域の発展と安定により大きく寄与することができるだろうということが、当時の私の脳裏にあったことでございました。その後、この対話が政府間だけのものではなくて、民間企業や学会を含んで大きく成長し、枝葉を茂らせているということは、大変にうれしいことです。

かつてタジキスタンのラフモン大統領を表敬したときのことでございますけれども、日本の企業はちっとも投資をしてくれないではないか、タジキスタンには水資源が豊富にあるというお話がございました。日本の企業は、中央アジアの国々をそれほどよく知らないのです。知らせる努力も必要だし、日本の企業は世界のいろいろな国から投資をしてくれと言われていて、そこから選択をするということをしなければいけないので、魅力を教えてあげることが大事なんですというお話をした記憶がございます。先ほど伺った話で、ビジネスの対話でも日本の企業に中央アジアの状況を知らせるという試みが行われているということを聞いて、大変にうれしく思いました。

私が行きましたときに、3年間で1,000人以上の研修生を受け入れるというお話をしましたけれども、その後の数字を聞きましたら、1,200人余りを3年間で受け入れたそうで、全体で、独立から2014年までの数字ですと、中央アジアの5カ国から9,200人ぐらいの研修生を日本は既に受け入れたということでございますので、そういった人材もまたベースとなって、中央アジアと日本の両者の関係はもっと

もっと深まっていくだろうと、うれしく思っています。

世界は、国際政治の観点からいいますと、北朝鮮の大量破壊兵器ですとかミサイルの開発の問題も含めて、以前よりも混迷を増してきたように思います。経済の面でも、ICTの発展とか、それをどのように一国経済に取り組んでいくか、気候変動問題にどう取り組むか、エネルギーの供給や需要構造の変革にどう対応していくか、さまざまな問題がございます。これらの問題は日本自身が現在取り組んでいる問題でもあります。ただ、それぞれの国が個別に取り組むよりは、共同して一緒に知恵をお互いに分かち合って取り組むことができれば、成果は大きいと私は思います。

今日のテーマは、日・中央アジア関係の今と未来を展望するという副題がついていますがけれども、先日、今年5月に開かれた第6回の外務大臣会合の共同声明を読ませていただきました。その内容は、国交回復以来25周年の記録、両国間の関係の豊かな発展を物語るにふさわしい、内容の濃いものであると思いました。また同時に、現在、先ほど申し上げたような国際政治経済が直面している問題に、この対話の枠組みとして、どう取り組んでいくのかという点について、明快な指針を与えていると感じました。そして、今後どのような変化が国際政治、そして国際経済に起こったとしても、この枠組みは常にダイナミックにそれらの変化に取り組んでいけるだろうという点について、私は確信を持った次第でございます。

関係の皆様これまでのご努力、関係を発展させるご努力に大いなる感謝を申し上げまして、そして、友好と相互信頼に基づくパートナーとして、平和と発展の道をともに歩んでいきたいと思います。私のできる限り、私のスピーチとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

田口精一郎(司会) 川口大臣、ありがとうございました。

次に、今次会合のためにアメリカ合衆国より来日いただきました、アメリカ外交政策評議会中央アジ

ア・コーカサス研究所所長のフレデリック・スター様より、中央アジアと東アジア 2000 年の歴史と題して、プレゼンテーションを行っていただきます。なお、このプレゼンテーションでは、英語から日本語の逐次通訳となります。ロシア語には、日本語通訳時に同時通訳させていただく予定でございます。

よろしくお願いします。

フレデリック・スター（アメリカ外交政策評議会中央アジア・コーカサス研究所所長） 尊敬する皆様、友人の皆様、同僚の皆様、今日は英語で話します。というのも、中央アジアの国々は、既に英語を上手に話すようになり、それを公の場で使っているのです、今日は英語で話をさせていただきます。通訳の皆様、事前にありがとうございます。

では、はじめに、過去四半世紀にわたり、中央アジア諸国が独立を果たし、新たな法体系を確立し、国会を開設、また経済発展、民営化、民有化を推進し、教育を改革し、グローバルなコミュニティを構築してこられたというすばらしい業績に対し、敬意を示したいと思います。また、この機会に、日本に対しても改めて敬意を表したく存じます。

中央アジアの独立国家を承認後、地震・土砂崩れの災害支援及び対策を実施した唯一の外国であった日本、特に新しい国家である中央アジアに対し、戦後日本のすばらしい経済発展を築いた礎となる制度・慣行を伝えたということは、非常に意味のあることであったと認識しております。しかも、こうした活動を全て日本は、いわゆるビッグブラザー、兄貴分として行ったのではなく、友人かつ対等のパートナーとして行いました。

そして、緊密な交流の後、やや距離を置いた時期を経て、2004 年に日本が「中央アジア+日本」対話というイニシアティブを確立されました。ぜひここで私から皆さんに強調したいのは、これが「日本+中央アジア」対話ではなく、「中央アジア+日本」対話であるという、この言葉の使い方です。私はこの違いは大きいと感じています。

そして、このイニシアティブを実践するに当たり、日本は新しい中央アジアの国々を、単に諸国家の集

まりとして捉えただけではなく、1つの地域として捉えてきました。この地域には独自の利害と展望及び相互関係があると日本が考えたからです。当時、外圧によって中央アジア自身の経済連合が崩れつつあったときに、日本が改めて、その地域主義を正当かつ必要であると主張し、確認したのです。私たちはユリウス・カエサル時代から、分割統治という言葉はよく耳にします。しかし日本のモットーは、言ってみれば合従による繁栄でありました。

距離を考えれば、中央アジアと日本はお互いにはるかずっと遠くにある、なかなか行きづらい国だと思うかもしれませんが、しかし、そういう気持ちがいまは生じませんでした。それにはもっともな理由がありました。つまり、中央アジアと日本のインタラクションは、それよりもずっと昔から続いていたからです。11 世紀、現在のキルギスタンで生まれたカシュガルのマフムードという人がいました。彼は民俗学と比較言語学の世界的な先駆者と言える人間です。そして、テュルク語派の研究成果を残したのですが、その成果の一つである地図に、日本が載っています。これは日本が載っている世界最古の地図と言えるでしょう。

もう一つ例を挙げましょう。中央アジアと東アジアの中間にあるサマルカンドという場所があります。ここには 7 世紀から残るすばらしいフレスコ画が残っています。このフレスコ画に描かれているのは、権力者に貢ぎ物をする朝鮮の商人です。ちょうどこのフレスコ画が描かれていた時期、日本では聖武天皇が世界中から工芸品を集めて、正倉院におさめていました。現在でも当時の正倉院の構造の中に残るこの至宝は、中央アジアから集めたものが数多く残っています。そして、先ほど川口様がおっしゃったように、日本にあるもの、秘宝を含めさまざまなものは、中央アジアから伝わってきたものなのです。

中央アジアと日本の関係は、貴重な品々の交易に限られたものではありませんでした。例えば日本への仏教伝来、これは中国から伝えられたものではありません。中央アジア、そしてアフガニスタンから伝来したものです。さらに、仏教経典をアジアの言

語に翻訳したのも中央アジアの人々でした。中央アジアの商人たちは、これらの経典を中国、日本、そして朝鮮半島へともたしました。

ちなみに、翻訳をした人たちは、そのまま仏教経典を直訳しただけではありません。まず、どの経典を翻訳するのか、編さんの事業というものを行っております。そしてさらに、私が意味あると考えるのは、翻訳のプロセスにおいて、みずからの考えもそこに加えて加味していったということです。つまり、中央アジアは東との関係において、単に受け身であっただけではないということがわかります。積極的に東アジアとの関係を形成し、そして影響を与えておりました。

そこで、1つの重要な真実にたどり着くわけですが、今日シルクロードの話は、我々は多く耳にするところでもあります。しかし、もともとのシルクロードを開き、そして管理していたのは、中国人ではなく中央アジアの人々だったことを皆さんはご存じでしょうか。もちろん中国人も、アフリカや中東にシルクロードを使って物を運んでいました。しかし、陸路において彼らは国境まで物を運ぶと、そこから先は中央アジア人に渡し、中央アジアの人たちが荷を運んで西方へ売りさばいたのです。つまり、中央アジアは、実はシルクロードにおいて、ユーラシア交易のまさに中心的役割を果たしていたわけであり、取引も中央アジアの通貨で行われることがしばしばありました。

また、紙は中国で発明されたとよく言われております。しかし実は、中央アジア人が中国から輸入された、かたいごわごわしたのを見たとき、それが竹と桑の葉でつくられていることに驚きました。それなら自分たちの土地に豊富な綿の繊維でつくったらどうだろうか。こうして私たちが今日知っている紙は、中央アジア人たちによる懸命な再考案によって生まれたのです。

シルクロードを開き、それを利用していたのは、ソグド人と呼ばれる民族でした。現在のウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタンに住んでいた民族です。アラビア軍が侵攻する以前、何世紀に

もわたって、これらソグド人たちは中国の内陸奥にまで交易所を設けていました。そして、日本との交易を行っていたわけです。すばらしい民族で、見事な芸術品、文学を生み出しております。もともとソグド人は宗教的に多様で寛容な民族でした。

長い間学者たちは、ソグド人たちが唐朝中国の影響、及び奈良時代日本の影響をどのように受けてきたかということを研究してきましたが、最近ではソグド人が東方にどのような影響を与えたのかという研究に変わりつつあります。中央アジア人たちが唐朝時代の中国の繁栄に一役買ったとすれば、その衰退を招いたのもまた中央アジアの民族でした。紀元750年ごろでしょうか、安祿山と呼ばれる中国人が大反乱を起こし、これが唐朝の衰退につながりました。しかし、この安祿山自身がソグド人の血を引くハーフの中国人でした。

それから1,000年たった、今から約1世紀前です。失われた中央アジア大文明の再発見に日本が重要な役割を果たしました。新疆オアシスの至宝を発掘したことによります。ご存じのように、8世紀にアラブの侵攻を受けたことにより、仏教、非イスラム文化の中心が東方へ、新疆の砂漠へと移りました。中央アジアの歴史において重要な事件がありました。それは、ハンガリー生まれのイギリス人オーレル・スタインとその探検家の仲間たちが、多くの古代仏教経典と資料をウイグルとウイグル周辺のオアシスで発見したときです。

しかし、あまり知られていないのが、実はこういった発見に日本人もかかわっていたという事実です。その1人が日本人の大谷光瑞伯爵です。大谷光瑞伯爵は日本の皇族とつながりがある方で、第一次世界大戦以前に3回にわたって新疆、中央アジアに発掘隊を送っています。そして、その後継者が橘瑞超です。大谷さんと橘さんは古代ウイグル資料、そして仏教資料を多く発見しまして、それを日本に持ち帰り、研究しています。こういった功績により、橘瑞超はロンドンの王立地理学会の会員に選ばれています。このように、中央アジアの歴史の忘れられた時代というものの再発見に、日本は積極的な役割を果た

たしました。

また、中央アジアを1つの地域単位として注目した最初の国が日本でした。何十年にもわたって日本の研究者たちは、アフガニスタンの古代の歴史と文化に興味を持ってきました。特に仏教における教義、そして研究が盛んでした。それは、アフガニスタンを中央アジアという地域の中の重要な場所として位置づけていたからです。実際、ソ連が意図的な境界線を引くまで、2,000年にわたってそれが事実でありました。

悲惨なタリバンの時代を経て、日本はアフガニスタンの国づくりの支援に大きく貢献してこられました。しかし、まだこの「中央アジア+日本」対話の枠組みの中に、アフガニスタンは入っていません。行く行くはそうなるであろうことを私は期待しております。

そこで、今日私が強調したいのは次のとおりです。EUもアメリカも、日本型の地域的アプローチを採用しました。そして、そのモデルに基づいて中央アジアとの相互作用を進めております。2007年にヨーロッパは初めて中央アジア戦略というものを採択し、その戦略のもとにシグニフィカントなパートナーとなりました。さらに、これに基づいてサステナビリティ、教育、人権、安全保障に関する上級年次協議をスタートさせています。また、日本のモデルに従って、似たようなストラクチャーがアメリカでも提案され、2016年に導入されました。

ヨーロッパ、アメリカ以外に、日本式の中央アジアとのかかわりを持つと見られるのがインドです。インドの文化交流は、ほかの大国よりはるか昔から、しかも深く始まっていました。科学、芸術、宗教の分野で、常に濃く、お互いに影響を与えてきたわけです。そして、これから20年以内にインドの労働人口は中国の2倍になると予想されています。ですから、今からインドに対して日本式の地域主義を採用するように促すことは、私はとても重要なことだと思います。

我々の世代での大きなチャレンジは、中国とヨーロッパの間のトランスポートのルートを開くことで

した。次の世代にとって大事な課題になるのは、日本、インド、そしてそこからヨーロッパという輸送の経路になるでしょう。

個々の独立国家の強化、そして地域全体の経済と市民生活の発展という2つの目的を両立させてきたのは、日本以外にはないと言っても過言ではないと思います。また、開発無償援助と市場主導型の投資案件というバランスも、このようにいい形で行えている国はほかにないと思います。人によっては、日本の中央アジアにおける積極行動は政治的ゲームにすぎないという見方もあります。また、ロシアと中国の影響力に対抗するのが日本の真の意図だという意見も確かにあります。しかし私は、こういった見方には非常に懐疑的な感を覚えます。日本はアジア全体において、常に多くのパートナーを持っていました。ですから、今、中央アジアで積極的にかかわらないということのほうが、私はずっと説明がつかないことになると思っています。

日本型のアプローチは、誰に対抗するものでもありません。中央アジアにとって、そして日本にとって、メリットのあるやり方なのであり、このような関係において損をする者はなく、皆が得をするとは私は考えています。

さて、25年の軌跡を振り返ると、中央アジアと日本は1991年以来、そしてとりわけ2004年以来、関係が発展してまいりました。これからまさにベストな時期が来ると私は予感します。そして、今日このような集いを将来振り返って考えたときに、あのときがさらに意義深いきずなをつくる出発点であったなと思う日が来るであろうと思います。

最後になりましたが、中央アジア諸国の政府が重要な扉を日本に開いたことに対し、お祝いを申し上げます。また日本政府におかれましては、中央アジア諸国及び地域に対し、発展の建設的支援を行ってこられたことに対し、敬意を表したいと思います。日本と中央アジアがともになし遂げてきた業績はすばらしいものであり、今後さらにお互いに実りのある四半世紀となることを祈念して、私のスピーチとさせていただきます。ありがとうございます。

した。(拍手)

田口精一郎(司会) スター教授、素晴らしいスピーチをありがとうございました。

次に、今次会合のために来日されました中央アジア各国からの報告者によるプレゼンテーションに移ります。なお、中央アジア各国からの報告の後に、日本側パネリストも含めましてのパネルディスカッションを予定しております。最後のパネルディスカッションの後に、会場の皆様からの質問を受け付ける時間を十分つくれますように、報告者の方々にお願いしましては、5分以内でプレゼンテーションを行うようによろしくお願い申し上げます。あまり時間が長くなった場合には、私のほうで合図をさせていただければと思っております。

会場の皆様にお願ひでございますけれども、質疑応答はパネルディスカッションの後に予定しておりますので、よろしくお願い申し上げます。

では、最初に、現在の「中央アジア+日本」対話の議長国でありますタジキスタンから、グロムジョン・ボボゾダ大統領府国際局長にお願いしたいと思ひます。よろしくお願いしします。

グロムジョン・ボボゾダ(タジキスタン大統領府国際局長) 議長閣下、各代表団の皆様、はじめに日本政府などに対して、今回の対話を開催していただいたことに深く感謝申し上げます。今回の中央アジア・日本対話ですけれども、定期的に行われているものでございまして、地域のさまざまな問題を検討するものでございます。政治や経済、文化、そして安全保障の問題なども検討しています。

こういった問題を話し合う前に、皆様にお伝えしたいことがございます。それは、タジキスタンの社会経済の発展についてです。タジキスタンは、独立後、難しい道を歩いてまいりました。大統領の指導のもと、タジキスタンは短期間のうちに独立し、安定した国になりました。

1つ例を挙げたいと思ひます。バランスのとれた政治、あるいは市場経済への移行、そしてGDPの成長については、毎年7%成長しております。また、貧困については、8%減りまして、現在約28%となっ

ています。

この中で私が言いたいことですが、国際的な金融機関、そしてパートナー国からの支援が大変重要だったということです。先般、第70回国連総会で採択された持続的開発目標に基づいて、2030年までのタジキスタン国家発展戦略が採択されました。これによりまして、国の経済の方向性、経済成長の方向性というのが定められたわけです。これは3つの期間に分かれております。そして、3つの目標も掲げられました。それはエネルギーであり、輸送の問題であり、また食料安全保障の問題でございます。

今年、日本とタジキスタンの外交関係樹立25周年になります。両国関係は、日・タジク友好協力に関する共同コミュニケを採択してから順調に成長を続けております。また、日本側の支援によって、我が国では幾つかの重要なプロジェクトが行われていま

す。しかしながら、1つだけ課題を申し上げると、両国のポテンシャルを十分に生かし切れていないということです。具体的には、日本がタジキスタンへの支援において、専ら技術協力に重点が置かれていることです。それは科学研究費補助金に重点が置かれているのが理由だと思ひます。もっと注目してほしいことは、例えば、日本からの「直接投資」を増やすこと、あるいは地域的な意味を持つような大規模プロジェクトを実施することです。地域協力については、本対話という協力の枠組みがありますが、地域的な問題というのは各国が調整したアプローチをとることによってはじめて解決できます。

また、中央アジアには大きな貿易経済協力のポテンシャルがある一方、そのポテンシャルを十分生かし切れておりません。世界銀行の予測によりますと、2017年から2019年の間にタジキスタンの経済成長率は5.8%になると言われています。トルクメニスタンについては6.5%です。2017年には、この地域の人口は1,700万人を超えると予測されています。

各国の経済については、お互いの国が補完し合うような関係にあります。中央アジア地域ではまた、各国に対する政治的な信頼も高まっています。そし

て、同地域の問題については、お互いに合意できるような解決策あるいは妥協点をお互いに見出していくことが重要になります。なお、タジキスタンとウズベキスタンの貿易高は、2016年には2倍になりました。

しかしながら、これはまだ私たちのスタートラインにしかすぎません。依然として様々な問題が残っています。例えば、水資源の問題や国境画定の問題などです。話を中央アジア諸国の貿易高に戻すと、各国間の貿易高というのは、それぞれの国の貿易高のわずか10%にしかすぎないわけです。このことから、私たちは今後もっと多面的に、全面的に協力を深めていかなければならないと思います。中央アジアは、今後10年でGDPを2倍に伸ばしていけるようにしていかなければならないと思います。

そういった意味で、この「中央アジア+日本」対話という枠組みは、二国間関係だけではなく、地域の統合に関する問題を話し合う、よい機会であると思います。そして、私たちが抱える共通の問題を議論する場でもあると思うわけです。その文脈におきまして、中央アジアは地域協力の強化を大変重視しております。そして、アフガニスタンの安定と平和にも関心を抱いております。これが可能になる方法といたしましては、国民の、つまりアフガニスタンの国民の生活水準を上げることが急務と言えます。

「CASA-1000 プロジェクト」がございします。これは、タジキスタンの電力をアフガニスタン、そしてタジキスタンに送るというものです。過激主義、国際テロ、そして麻薬や武器の密輸というものがはびこっているわけではございますけれども、それを解決していくために、タジキスタンは全力を尽くしたいと考えています。このような状況におきまして、一国で現代の脅威に打ち勝つことはできません。タジキスタンとしては、今後も各国と協力していきたいと思っています。(拍手)

田口精一郎 (司会) ありがとうございました。

次にカザフスタンから、サヤサット・ヌルベック、アスタナ国際金融センター・マネージングディレクター様にご発言をお願いいたします。

サヤサット・ヌルベック (カザフスタン・アスタナ国際金融センター・マネージングディレクター) ありがとうございます。はじめに、尊敬する皆様、尊敬するオーガナイザーの皆様、このようなすばらしい会議で発言の機会をいただきまして、ありがとうございます。日本のカザフスタン大使から、私たちの金融センターについて話をするようにとアドバイスをいただいております。この話をする前に、両国関係がどのように進展してきているかについてまずお話ししたいと思います。

この25年間、4分の1世紀にわたり、カザフスタンと日本はさまざまな分野で実りある協力を進めてきました。こうした協力は、政治経済、先端技術分野において両国関係にもしっかりと反映されております。両国がこれまでに結んだ協定文書は44件以上になります。その中には、両国の長期的な関係構築に関わる大きな意義を持つ文書も含まれています。現在カザフスタンでは、50以上の日本資本の入った会社がさまざまな分野で業務を展開しています。エネルギー、鉱山採掘業、また非常に重要な原子力エネルギー分野など、大変重要な分野といえます。

1993年12月に、カザフスタン・日本経済官民合同協議会が立ち上げられました。そのおかげで、2005年から2015年の10年間で、日本からカザフスタンへの直接投資の額は累計で62億となっております。昨年11月7日、東京で官民合同協議会の第6回目の会合が開かれました。この会議に合わせ、13件の民間の契約が結ばれ、その総額は12億ドルになりました。

文化・人的交流の分野でも緊密な関係が構築されています。JICA（国際協力機構）を通じた協力や、日本外務省の文化無償資金協力などがそれです。また、過去にセミパラチンスクと呼ばれた核実験場があったセメイと、広島・長崎の医療機関やNGOの間に緊密な連携が生まれています。さらに、ロジスティックセンターや、セミパラチンスクには核医療センターも建設されました。16年前、JICAのプログラムで私は東京に留学し、研修を受けました。これは日本政府の最初の奨学金を得たものでした。唐突

ですが、山口様にはお礼を申し上げたいと思います。

10カ月前、2016年の11月6日から9日にかけて、カザフスタンのナザルバエフ大統領は4回目となる日本公式訪問を行い、安倍総理大臣との首脳会談を行いました。両首脳は、アジアにおける繁栄のための戦略的パートナーシップに関する共同声明に署名をしました。首脳会談では両国の政治分野での連携や、経済貿易関係、文化・人的交流など、広範な問題に関する協議が行われました。

その際、大統領に随行したアスタナ国際金融センターのケリムベトフ理事長をトップとする代表団は、日本の金融機関代表と一連の会談を行い、日本証券業協会と協力に関する覚書を調印しました。また、代表団は、みずほフィナンシャルグループ、三井住友フィナンシャルグループ、日本取引所グループ、野村アセットマネジメントとも会談を行いました。日本側からは、アスタナ国際金融センターへの参加について関心が示されました。

アスタナ金融センターは、壮大なエクスペリメント、実験として構想を得たものでありまして、ブリティッシュ・ロー、コモンローというイギリス法をベースとした業務展開ができる場として提供しております。つまり、これはアスタナ金融裁判所、国際金融所、裁判所、そして国際仲裁裁判所など、国際的なスタンダードに即した業務展開が可能となります。

2015年に、カザフスタンは「国家の計画：100具体的な手順」の実現を開始させ、2017年にアスタナの国際金融センターを開設しました。国際金融センターは、ドバイの金融センターをモデルとしており、外国人審査員の参加を得て手続において英国法と英語の言語を使用します。

また、ナスダックなどの状況に合わせ、アメリカの証券取引所、シェアホルダーとの関係づくりというものも参考にし、そしてITトレーディングテクノロジーも導入をし、世界有数のプラットフォームとしてサービスを提供していきたいと思っています。そして、上海証券取引所においても、大変参考になる中国のインベスターとの間の関係づくりが行われ

ております。このような場所がアスタナにできるということでもあります。

このような金融市場を目指すとともに、資産運用という2つ目の柱になりますけれども、ここではさまざまな民営化されるカザフスタンの機関などにかかわるもので、野村アセットマネジメントが非常に大きな関心を抱いてくださっております。日本のみずほ、住友フィナンシャルコーポレーションなどとも協力していきたいと思っておりますし、また、イスラム金融は非常に重要な、1億規模の市場となっております。そして、7,000万、8,000万という中央アジアの市場においても、イスラム金融は非常に重要だと思います。

それから、このアスタナ金融センターにおいては、税制優遇がとられることになっておりますので、投資家にとっては大変大きな関心を持っていただけたと思います。丸紅、東芝、その他の日本の有数の企業が中央アジアのエネルギー部門で業務を展開してくださっておりますけれども、この取引所に大きな関心を示してくださっております。今後、外国の会社にもかかわっていただき、民営化を進めていくことができると思っております。このような会社のシェアを持っていただくという形で協力をしていただくことができます。

また、ここで謳われている優遇策ですが、50年にわたり法人税、個人所得税、土地税、資産税が免税となります。オフィスは無料で2年間提供されます。賃貸料を払わないで2年間使うことができます。それから、ビザの簡素化を図ります。ビザなしで30日まで、この金融センターのレジデントとそのメンバーは特別の体制として享受していただけますし、5年まで延ばすことができます。そして、さまざまな手続においては地元の官僚主義にぶつかることなく、順調にさまざまな許認可業務や登録業務を行っていただくことができます。

また、シルクロードの復活という点でも、このプロジェクトは大変魅力あるものになっていくと思います。

ありがとうございます。(拍手)

田口精一郎（司会） ありがとうございます。

次にキルギスから、アザマト・ディカムバエフ国立戦略調査研究所所長にご発言をお願いいたします。よろしくお願いします。

アザマト・ディカムバエフ（キルギス国立戦略調査研究所所長） 皆さん、こんにちは。はじめに、私からは日本の政府に対して、このような対話の場をつくっていただいておりますことを、また私がここで発言できることを、心から御礼申し上げたいと思います。

25年前、キルギスタンは独立国家になりました。その新しく生まれたキルギスと最初に外交関係を樹立したのが日本でありました。日本はさまざまな形で、キルギスが歩み出すために経済的、そして金融的な形でさまざまな支援をしてくださいました。今年、外交関係樹立25周年という大切な時を迎え、私としては、これまで日本との間で培ってきた関係について、それを総括、評価し、私どもが何を感じているかをお伝え申し上げたいと思います。

幾つかのファクターを取り上げたいと思います。第1に外交的な基盤。これは大変にすばらしい成果が得られていると思います。第2に経済関係ですが、この部分ではまだまだできることがあると感じています。第3に文化交流ですが、非常に深まっており、安定的かつ継続的に続いています。第4に中央アジアという枠組みの中での地域協力ですが、この点についても年を追うごとに、その重要性を皆が認識し、重要性が高まっています。

一言で言うと日本は、開かれたパートナーシップというものを持って私たちとの協力に取り組んでくださり、両国をお互いの好意と尊敬をベースにして、関係を大きく発展させてきました。それは今後も大きな可能性を秘めていることを物語っていると思います。

最初に、外交関係について触れたいと思います。全般に密度の高い交流をしてきまして、システムチックにさまざまな外交ルートというものができました。ただ、2004年から2013年に関しては、若干交流が鈍化した感じが否めません。

次に経済関係ですけれども、経済協力というにはまだまだふさわしくないレベルにあるように思います。両国が持っている将来の可能性というものを、これからぜひとも実現していきたいと思っています。また、貿易投資の水準についても、まだまだ他国と比べて低いレベルにあります。ただし、日本はODAというツールを使って我が国を支援してきてくださいました。1993年から2003年の間、日本はキルギスへの最大の支援国となってくださったわけであります。その支援の主な対象先は、運輸、とくに交通セクターのインフラ整備などでありました。

ただし、2000年以降、経済協力が低下してきた事実もあります。ちょうどこの時期、外交関係が消極化した時期とも重なっております。この事実については、よくよく私たち自身、つまりキルギス自身が考えるべきだと思います。何がその原因になったかということ、1つ目には権力の一極集中化がありました。また、汚職の蔓延化です。2つ目に、武装勢力による日本人質事件などが起こったことです。また政治においては、2005年から2010年の間に様々な革命が起こったため、不安定になったこともあげられます。

こうした状況から抜け出す上で重要な役割を担ったのは、2013年から2015年にかけてのハイレベルな交流でした。まず、キルギスの大統領が日本を公式訪問いたしました。その後、両国外務大臣の相互訪問があり、キルギス議会のスポークスマンの日本訪問もありました。また、エポックメイキングとしては2015年、日本の安倍首相がキルギスを初訪問し、これは歴史的な出来事といえました。加えて、本年、日本政府は信用供与を再開してくださり、キルギス発展のために、我々が長年待ち望んでいた方向にかじを取ってくださっています。それは銀行セクターへの日本からの直接投資が始まったということでもあります。

次に、文化交流についてですが、非常に高いレベルを保っています。それは何よりも、両国民がお互いに対して、深い好意を抱いているからだと思っています。両国関係の根底をなしている文化交流につ

いて、これまで多くのプロジェクトが実施されてきました。困難な時期を互いに支え合ってきたのも文化交流があったからであります。現在、人材育成についても投資が行われており、大きな意義があると感じています。

地域協力ですが、これは複雑な問題を抱えております。その理由として、「中央アジアとは何か」という問いに関わる問題だからです。経済、文化、安全保障、インフラ、統治のあり方など、さまざまなプリズムをかけると、それぞれの分野によって地域統合のあり方、中央アジアとは何かという問いに対する答えが異なってくるからです。

中央アジア各国の協力が語られるとき、常に3つの機能的な役割というものがある、この中央アジア5カ国がどのようにそれを担っていくかということが語られます。1つ目には、資源をどのように利用していくか。2つ目には、経由地としての役割をロジスティックの面でどのように果たしていくか。また3つ目として、国際安全保障への参加のあり方ということでもあります。社会・文化的なバックグラウンドというものの、4つ目にあるのではないかと思います。

いずれにしても、グローバルプレーヤーである、ロシアや中国が、それぞれ大きなプロジェクトを進めています。ロシアでいえばユーラシア経済連合であったり、集団安全保障条約であったり、また中国は有名な「一帯一路」など、これらが中央アジアに無縁であるとは考えにくいと思います。では、それにどう取り組んでいくか、どのような参加をしていくか、あるいはしないのか、今後日本と中央アジアの協力のモデルのあり方がどうあるべきか、ということも考えるべきかと思います。多国間を重視するのか、あるいは二国間協力を重視するかです。

今後の協力のあり方を考えるときに、私たちが真剣に取り組みたいと思っていることは、次のとおりです。すなわち、1つ目に、二国間関係の基礎というものを今後も大事にしていく、つまり高度な外交であり、信頼関係であり、国民がお互いに抱えている好意であります。

2つ目に、キルギス自身が近代的な民主国家の建設というものに、さらに努力し取り組んでいく必要があります。友人として、またパートナーとしてそばにいてくれる日本の支援に応えるためにも、これが必要だと思っています。

3つ目に経済協力ですが、これまでの経済協力から、ぜひとも一日も早くビジネスパートナーになりたい、ビジネスパートナーシップを築きたいと思っています。

そして4つ目に、中央アジアに対して統合の未来モデルとなるための支援を今後ともお願いしたいと思います。

ありがとうございます。(拍手)

田口精一郎（司会） ありがとうございます。

次にトルクメニスタンから、グルバンムハメット・カシモフ外務省特任大使にご発言をお願いします。よろしくお願いします。

グルバンムハメット・カシモフ（トルクメニスタン外務省特任大使） 堀井学様、そして参加者の皆様、トルクメニスタンを代表いたしまして、皆様にご挨拶を申し上げたいと思います。「中央アジア+日本」対話に対してご挨拶を申し上げるとともに、この会の成功をお祈り申し上げます。

トルクメニスタンは、他の中央アジア諸国と同じく、二国間協力や地域協力をアジア太平洋地域諸国とともに築いていきたいと考えております。その中には日本も含まれます。こうした国々は重要な役割を国際政治において果たしています。

こうした流れの中で連結役を果たすべきであるのが、数ある多国間協力に関する地域プラットフォームであり、この「中央アジア+日本」対話もその一つであります。それをよく証明しているのが、中央アジア諸国のこの対話への積極的な参加であろうと思います。これらが示していることは、私たちの今後の連携が有望であるということ、そして潜在的可能性として、将来的に具体的な成果を地域問題や国際問題において達成していくことができるということです。

今年、私たちは日本・トルクメニスタンの外交関

係樹立 25 周年を祝っています。両国の首脳と外務大臣はこれに際し、お祝いのメッセージを交換いたしました。近年、両国関係は様々な分野において一貫して発展しております。特にここ数年においては、関係の活性化が見られています。これは、両国首脳の公式訪問によるものです。2009 年、2013 年、そして 2015 年は、公式訪問と実務訪問で、トルクメニスタンのベルディムハメドフ大統領が日本を訪問いたしました。また 2015 年 10 月には、安倍首相がトルクメニスタンを公式訪問しました。

こうした訪問の中で、多くの合意が得られました。投資協定の総額は 180 億に上ります。また、今後数年の多面的な協力の分野というのが定められました。また、協力については、政治、経済、エネルギー、運輸、ガスเคมี、科学技術、文化といった分野で達成されました。

私たちの両国関係の中で、主要な分野の一つとなるのがエネルギー分野でございます。お互いの協力によりまして、この分野で大きなプロジェクトが実施されております。日本企業も参画しています。日本の先端技術を導入することによって、トルクメンバシ製油所の大規模な近代化が行われました。このほかにも現在、日本の企業である川崎重工や東洋エンジニアリングが参加する形で、2つのハイテクプロジェクトが天然ガス加工分野で行われています。そのプロジェクト総額は、50 億ドルに上ります。

こうしたプロジェクトの中で、Owadan-Depe 地区において GTL (Gas to Liquids) プラントの建設が予定されておりますし、また大型ガス化学コンプレックスをキアンリに建設するということが考えられています。ここではポリエチレンやポリプロピレンを製造することになります。こうしたプラントの稼働については、2018 年の後半を予定しています。

「中央アジア+日本」対話におけるさらなる協力を私たちは重視しつつ、議長国として重要な問題の議論や解決に努めてまいりました。これは、中央アジアの互恵的な地域協力の発展に関する問題です。2014 年、我が国は議長国コンセプトを発表しました。その中で、中央アジア諸国と日本のパートナーシッ

プに関する主要なパラメーターを設定いたしました。これは幅広い分野をカバーするものとなっております。国際的な、あるいは地域的な安全保障、持続可能な開発、効果的な貿易経済関係の土壌づくり、人的・文化的交流などの問題を含んでいます。

ご存じのとおり、2017 年の 5 月 1 日にはトルクメニスタンにおきまして、「中央アジア+日本」対話の第 6 回外相会合が開催されました。この会合におきまして、参加者は各国の連携に関する幅広い問題を議論いたしました。また、意見交換といたしまして、様々な分野に関する意見交換が行われました。

会合におきまして、トルクメニスタンはイニシアティブを発表いたしました。それは、地域的な、そしてグローバルなトランジット輸送回廊を構築しようというものであり、テロや麻薬対策における協力であります。主要テーマとして設定されたのが、各国の利益を踏まえた具体的プロジェクトによる協力です。運輸・物流分野地域協ロードマップも採択されました。また、共同声明で、中央アジア諸国と日本の多年にわたる協力とさらなる関係強化が署名されました。

皆様、私たちはこの「中央アジア+日本」対話という枠組みの中で、このロードマップを新たなアイデア、イニシアティブで遂行していかなければなりません。今年、日本と共同で一連の文化イベントを実施いたしました。これは中央アジア諸国と日本の外交関係 25 周年を祝うものでございます。この場をおかりいたしまして、この節目の年をお祝いするとともに、皆様の健康、そして友好的な関係の強化を祈念いたします。この 25 年間の協力におきまして、日本は信頼できるパートナーであり、多くの分野で協力できる国であるということを示したと思います。

最後になりましたけれども、トルクメニスタンは今後も二国間協力を新たな次元に引き上げるために努力をしていきます。両国民のため、そして中央アジアの安定した発展のために尽力していくつもりでございます。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

田口精一郎 (司会) ありがとうございました。

最後にウズベキスタンから、ムザファール・マドラヒーモフ外務省アジア太平洋局日本課長にご発言をお願いいたします。

ムザファール・マドラヒーモフ（ウズベキスタン外務省アジア太平洋局日本課長） ありがとうございます。はじめに、心から感謝の気持ちを述べたいと思います。日本の外務省の皆様他、この会議にお招きいただき、ありがとうございます。また、今回の会議では、両国の今後の連携についても議論することになります。今後の日本との友好関係を発展させていくことは、ウズベキスタンの外交政策の1つの大きな柱となっています。

今年は日本とウズベキスタンは両国外交関係の樹立25周年になります。ウズベキスタンと日本は開かれた実りある対話を、二国間関係や多国間関係など、あらゆる方向で行ってきました。日本はウズベキスタンにとって、長い年月を通じて大切なパートナー国であり、我が国の根本的な改革のためのプログラムや、経済・社会の近代化プログラムの実施に多大なご支援をいただけてきました。

2015年10月には、日本の安倍総理大臣がウズベキスタンを訪問され、その成果は両国の多面的かつ互恵的な協力をさらに前進させるものとなりました。政治的な協議は定期的に行っております。去年の3月にも同様の協議が行われております。議会間の交流も進んでおり、日本では日本ウズベキスタン友好議員連盟や、民主党の日本ウズベキスタン友好連盟もつくられております。ウズベキスタン議会アリー・マジュリスでは、議会交流のためのグループ、アリー・マジュリス日本国会というグループがつけられています。

ウズベキスタンは日本の外交政策を一貫して支持しています。また、地域と国際社会の安全や環境問題の解決に向けたイニシアティブを支持しています。両国の立場は、地域や国際社会の多くの重要な問題で一致しています。例えば、国連改革、大量殺戮兵器の不拡散、安全保障、テロとの戦い、過激主義や不法な麻薬取引との戦いなどです。国際機関でも実りある協力が行われております。ウズベキス

タンは日本の国連安全保障理事会の常任理事国入りを支持していますし、またユネスコにおける日本の進出も支持しております。

両国関係の重要なメカニズムとなっているのが「中央アジア+日本」対話であります。2004年に日本の提案で立ち上げられたもので、中央アジアの国々との協力を深めることを目的としています。ウズベキスタンとしては、運輸分野の協力や技術の導入、さまざまな自然災害における日本の技術や対応を学ぶ重要な機会となっております。

ウズベキスタンには1999年、日本のJICA（国際協力機構）の地域事務所が設置されました。この他、ウズベキスタン日本センターも開設されました。無償資金協力や技術支援に加え、両国のビジネス協力や民間団体同士の協力の推進に貢献していただいております。日本の資金援助で、ウズベキスタンでは一連の社会的に重要な意義を持つプロジェクトが実施されてきました。医療・ヘルスケア、教育、エネルギー、輸送、テレコムなどです。

一方、貿易経済関係を見ると、両国のポテンシャルを十分に生かしているとはいえない面もあります。2016年における両国の貿易取引高は2億5,970万ドルで、このうち輸出額は1,300万ドル、輸入額は2億4,670万ドルになります。

今後の両国関係の発展のためには、従来の協力関係を続けるほか、定期的な往来を首脳レベルやハイレベルで継続されることが重要であります。その他、国連やその他の国際機関との協力関係の強化も重要であります。そのためには、「中央アジア+日本」対話の枠組みを発展させ、資金供与や技術協力という形の協力を今後も続けていきたいと思っております。また、日本の大手企業との関係を拡大し、エネルギー、石油、ガス、ケミカル、鉱山採掘分野、機械製作、電気機械製作、薬、軽工業、医療機械製作、ツーリズム、銀行・金融セクターなどの分野における協力も加速させる必要があるといえます。

さらに、観光分野でも協力関係を深めていきたいと思っております。特にシルクロードに力を入れ、日本人観光客を増やしていきたいと思っております。両国の協力

関係を高いレベルで、またさまざまなレベルで続けていくということが大変重要だと思いますし、地域政策、また国際政治における政策連携・協調を進めていければと思います。

「中央アジア+日本」対話の枠組みを、積極的な両国の関係及び地域と日本との関係発展に十分に利用していきたいと思います。金融セクターにおきましては、長期のローンを使わせていただき、ウズベキスタンのエネルギーセクターにおける業務の展開に貢献をしていきたいと思います。また、先進・先端技術や新たな技術の導入も進めていきたいと思いますし、大学間の交流も進めていきたいと思います。日本の大学や教育センターへのウズベキスタンの学生の受入枠を、ぜひ拡大していただきたいと思います。また、シルクロード観光地には、サマルカンド、ブハラ、ヒワなどに、ぜひたくさんの日本の観光客にいらしていただきたいと思います。

このようにして両国関係、そして中央アジアと日本の関係が、安定して発展していくことを望みますし、それが経済・社会的な課題、環境保護の分野での課題の解決に貢献することを心から望んでおります。

ありがとうございます。(拍手)

田口精一郎(司会) ありがとうございます。

続きまして、日本側報告者も交えての、今後の日本と中央アジアの関係を語るパネルディスカッションに移らせていただきます。本日のパネルディスカッションのモデレーターを務めていただきますのは、宇山智彦北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授でございます。

宇山教授、よろしくお願いいたします。

(2) パネルディスカッション

宇山智彦(モデレーター) よろしくお願ひいたします。私は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターで中央アジアの近代史と現代政治を研究しております。現在、日本中央アジア学会の会長も務めております。

今、中央アジア側からのプレゼンテーションでは、

共通する話題として、日本と中央アジア各国との二国間関係の歩みと現状と課題、それから「中央アジア+日本」対話の現状と可能性、そして中央アジア諸国同士の地域協力の問題が取り上げられたと思います。「中央アジア+日本」対話の大きな目的は、中央アジア諸国同士の協力を進めるということでしたので、最近中央アジア諸国間の協力が進んでいるのは大変喜ばしいことだと思います。また個別の話題として、アフガニスタンとの関係や国際金融の問題なども提起されました。

ここからは、日本側のパネリストを交えた議論となりますが、私が考えますに、2つの方向性が重要かと思います。1つは「中央アジア+日本」対話、及び中央アジア諸国と日本との関係において、具体的にどういう分野を発展させていけばよいということ。「中央アジア+日本」対話はこれまでに、例えば農業とか環境問題、そして近年は特に運輸・物流の問題といった具体的なトピックを議論してきたと承知しております。

それからもう一つは、現在、世界情勢がかなり激しい変動期を迎えている中で、国際環境の中で中央アジアと日本の関係をどう発展させていけばよいかということを議論できればと思います。

少し予定より時間が遅く始まっていますが、フロアにもさまざまな形で中央アジアと日本の関係にかかわっている方々がいらっしゃいますので、なるべく早くフロアを開けるようにしたいと思いますので、パネリストの皆様にはなるべく簡潔に発言をお願いしたいと思います。

日本側から3名の方にコメントをこれからいただきたいと思います。お一人目は宮家邦彦様、キャノングローバル戦略研究所の研究主幹で、以前は外務省で主に中東関係のお仕事をされて、現在評論家として大変幅広く活躍をされております。

それでは、よろしくお願いします。

宮家邦彦(キャノングローバル戦略研究所研究主幹)
経済問題については、あとのお二人がお話をすると思うので、私は5人の方の話を聞いて、1つのコメントと2つの質問をしたいと思っています。

まずコメントとしては、中央アジアをどのようにユーラシア大陸の中で位置づけるかということなんですが、私の考え方は間違っているかもしれません、ユーラシア大陸の中にはロシアと中国とイスラムという3つの、ある意味で現状変更勢力になり得るものがあると思っています、その中で、この3つを同時に抱えているのは中央アジアだけだと思います。その意味で、これから中央アジアの地域というのは大きな変化が起こり得ると考えております。

今申し上げたことは、先ほどフレデリック・スター先生がおっしゃったことと矛盾するわけではありません。日本は政治的にももちろん重要な地域ではありませんけれども、常に善意であって野心がなくて、そして文化的に脅威とならない存在であり続けるパートナーであるということでございます。

そこで、質問が2つございます。1つは、この地域、特に私が関心あるイスラムの将来をどのように各国で見ておられるのか、もしそれを教えていただけたらありがたいというのが1点です。第2点は、皆さんロシア語をしゃべるわけですから、ロシアの影響があるわけですが、中国というものを各国がどのようにごらんになっているかというのを、ぜひ教えていただきたいと思います。

最後に締めですが、この中央アジア、これを見ますと、先駆者であられる大先輩もおられれば、非常に若い方もおられて、非常にありがたいことだなと思っています。中央アジアの各国の皆さんも、こうやって若い中央アジアのファンがどんどんできてくることを私は確信しているので、ぜひ今後とも二国間関係、そして地域との関係を発展させてください。よろしくお願いします。終わりです。(拍手)

宇山智彦(モデレーター) 宮家さん、大変簡潔なご発言をありがとうございました。

引き続き、古宮健一郎様、澤田ホールディングス取締役にご発言をいただきます。澤田ホールディングスは、日本で大変有名な旅行会社であるエイチ・アイ・エスと関連する企業で、今年キルギスタンのキルギスコメルツバンクの株を取得して子会社にしたという、日本と中央アジアの関係においては大変

新しい取り組みをされている会社です。

それでは、よろしくお願いします。

古宮健一郎(澤田ホールディングス株式会社取締役)

澤田ホールディングスの古宮でございます。中央アジア全体のお話をするような知恵も持っておりませんので、私からは、キルギスの銀行でということをしようとしているかを簡単にお話しして、その中でいろいろなことを酌み取っていただければと思います。

私どもはキルギスの日本大使館、そして JICA、IFC の方々のご協力を得まして、今年6月に、小さい銀行でございますが、キルギスコメルツ銀行というものの6割弱の出資をして、投資が終わったところでございます。今後、キルギスというのは経済もそうですし、金融もそうなんですが、まだまだ改善の余地が大きいと考えておりまして、その中に私どもが身を置くことで、いろいろなことが展開できるのではないかと考えているわけでございます。

この国の最大の魅力は、私は人だと思っています。「何それ?」と思われるかもしれませんが、非常に資源の少ない国ではあるんですが、大学数が人口に比して非常に多いと。600万人の人口で80校近い大学があるんですね。教育レベルが非常に高い国であります。それによって、多分民主化が非常に進んでいるということも、その影響かなとは思っているんですが、ただ残念なことに、大学は出たけれども、国がなかなかいい働き場所がないということで、多くの国民がロシアやカザフスタンへ出稼ぎに行っていると。これが実態でございます。

金融も非常にレベルが、言葉は悪いんですが、おくれております。ただ、私どもは逆にそういうところであればこそ、わずかな投資で、知恵を持ち込むことで、大きな改善ができるのではないかと考えた次第でございます。また、どんな事業もそうなんですが、知らないところで我々だけが行って、何か事業をなし遂げられるかと。これは完全に無理でございます。いろいろな方のご協力が要ると。この国は非常に、先ほど申し上げた教育レベルが高いということと、親日的であります。

それから、今回現地の我々のパートナーとしてすばらしい株主、今までの既存の銀行の株主、非常にすばらしい方なんです、その方と手を握ることができました。また、その銀行の経営幹部が非常に若くて、非常に能力が高い。こういうことで、我々はこれから彼らと力を合わせて、キルギスというマーケットの中で顧客支持ナンバーワンの最先端の銀行をつくるつもりにしております。こうした活動がもうまくいくようであれば、キルギスの発展に多大な役立てるのではないかと考えております。

それから、中央アジア全体の話にも若干なるかもしれませんが、まだまだ日本からの企業の進出が十分可能なところだと思っています。実は私どもも、アフリカとか東南アジアもいろいろ検討しました。アフリカなんかは過去の植民地時代の欧米の資本ががちがちに入っていて、しかも教育レベルが非常に低い。なかなか正直言って、国の発展が難しいんですね。白人がみんな押さえている。東南アジアも近年、いろいろな国からの参入もあって、それなりに成長は遂げているんですけども、変な話ですが、投資金額が非常に大きくなります。採算が合わないんですよ。

ということで、キルギスのいいところは、先ほど言った人的なこと。それからもう一つは、エネルギー。要は水が、電力が非常に安いということです。それからもう一つは、これは言っていないかどうかかわからないんですが、給与水準が非常に低いので、投資効率が非常に高いです。こういうこと全体を考えまして、これから一生懸命、現地の銀行の連中と、あるいは向こうの株主と役員と一緒に、頑張ってまいりたいと思っております。

私は残念ながら、ウズベキスタンは行ったことがあるんですが、正直申し上げて、ほかの国はあまりよく知りません。ほかの国のことを偉そうに申し上げるつもりは全くありませんが、キルギスへ進出を検討される企業様におかれましては、私どもは現地での金融面のサポートを、銀行でございまして、させていただきますし、それから、安心できる現地の企業を銀行としてご紹介させていただこうと思っ

ております。

私自身も元銀行員でございまして、通常の金融知識はありますので、何かご相談事があれば、いつでもおっしゃっていただければと思っております。

私からは以上でございまして。(拍手)

宇山智彦(モデレーター) 古宮さん、新しい具体的な取り組みに基づいたお話を、どうもありがとうございました。

続いて、本間勝様、欧州復興開発銀行 (EBRD) 東京駐在員事務所長にご発言をいただきます。日本と中央アジアの関係というと、日本という国の取り組みに注目が集まりがちですけれども、日本は国際機関を通して中央アジアと深くかかわっておりまして、アジア開発銀行 (ADB) や EBRD で中央アジア関係の仕事をしているのは、主に日本人です。本間様は EBRD で長く中央アジア関係のお仕事をしてこられた方です。

それでは、よろしくお願いいたします。

本間勝(欧州復興開発銀行東京駐在員事務所長)

どうもありがとうございます。EBRD 東京事務所長の本間でございます。第 10 回東京対話の開催、大変おめでとうございます。今、宇山先生からお話のありましたように、過去 15 年間 EBRD で勤務しておりまして、その 14 年間はロンドンで中央アジア局長ということで、中央アジアの特にキルギスとかタジクとか、あるいはモンゴルも含めて、地域の担当をしておりました。

それで、この東京対話の発足前に、当時の外務省 CIS 室長の道井さんに今後どうやって運営していったらいいだろうかと相談を受けたことがございました。私がお答えしたのは、すごく難しいと思う。継続してやるためには相当の工夫が必要だろうということで、レストランで 3 時間ぐらい大議論をした記憶があります。そういう意味で、10 回目まで持ってきたのは、関係者のご努力が実ったものと考えております。

これには後日談がございまして、EU がやはり 2000 年代後半に中央アジア政策を決めていく際に、ベルリンに私も呼ばれて、中央アジアを EBRD

はどう取り組んでいるかという説明をした際に、一番聞かれたのは「中央アジア+日本」対話でした。日本はどう運営しているのかという話をさんざん EU の官僚に聞かれまして、非常に興味を持っているのはよくわかりました。いいモデルだと考えていたようでありまして、それ以降、彼らも同じような仕組みを立ち上げて、今もやっているということでございます。

それで、中央アジアですけれども、今、大きな変化に直面しております。まず第 1 は、先ほど宮家先生からもお話がありましたように、中国とロシアが新しい取り組みを始めてきていることです。特に中国は、一帯一路政策、AIIB、それからシルクロードファンドなどを使って、あの地域にかなり熱心に入り込もうとしております。一方でロシアは、ユーラシア経済共同体というスキームを使って、かなり強引ではありますが、入り込んできております。

こうすることで、まず外からはいろいろなお金が流れ込み、またいろいろなスキームが導入されてきております。一方で内部的に言いますと、ウズベキスタンには最大の人口を持っている、3,200 万人の大国であります、いよいよ変わってきています。

カリモフ大統領が亡くなってから、ほぼ 1 年たつわけですが、私も 8 月にウズベキスタンに出張してきました、そのときに、明らかに改革がスピード感を増してきており、人の入れかえものすごく激しいと感じました。今、為替統一を本気でやるつもりになっているということも大体わかりました(9 月初めに実施)。今までやってきた政策というのは、近隣国との関係を改善する、対外開放をやっていく、民間セクターを育成するということでありましたが、いよいよ為替統一の方向に動いてきているのです。これが非常に大きなモメンタムになるだろうと思います。

EBRD とウズベキスタンの関係ですけれども、ご存じのように非常に問題があったわけですが、今、ようやく 3 月に EBRD 総裁がウズベキスタンを訪問しまして、関係改善が成り立っております。それで、こんな環境でございますので、EBRD は去年から東

京事務所をつくりまして、中央アジアを含む EBRD 地域に投資を持っていこうと、努めているところで

す。

中央アジアを長らく見ておきますと、EBRD は年間大体 70 件から 80 件ぐらい中央アジアで投資をしておりますので、今の新しい環境では、観光事業、あるいはアグリビジネス、テキスタイル、それからバンキングセクター、電力、あるいはマイニングですね。このあたりは非常に将来性があるんじゃないかなと思って見ております。そういうことで、何かありましたら、ぜひまたご相談いただければと思います。よろしくお願いいたします。(拍手)

宇山智彦 (モデレーター) 本間さん、EBRD の多様な経験に基づくお話をありがとうございます。

ここからは、中央アジア側のパネリストの方々から、ただいまの日本側パネリストの発言に関連させた発言をお願いしたいと思います。発言なさりたい方は、手を挙げてお願いいたします。いかがでしょうか。

それでは、こちらから指名をしてということにさせていただきます。

それでは、先ほどとは順番を入れかえまして、最初にウズベキスタンのマドラヒーモフさんをお願いしたいと思います。

ムザファール・マドラヒーモフ 宇山先生、ありがとうございます。このような機会をつくっていただきまして、もう一度、心からお礼を申し上げたいと思います。

そして、繰り返しになりますが、ウズベキスタンは建設的な日本のアプローチというものを、中央アジアに対するアプローチというものを支持していますし、今後の発展については非常に楽観的に見えています。この「中央アジア+日本」対話、安定した地域の発展、そして日本が貢献をし、国際関係をつくっていくという方向性は、大変よいものだと思います。

そして、本間様からウズベキスタンにおける改革の歩みというご紹介がありました。ほんとうに大規

模な改革が行われています。政治的にも経済的にも、社会分野でも、あらゆる分野にわたる改革が行われており、国内政治だけではなく、対外政策にもこの変化が見られる、感じられると思います。ウズベキスタンにとって、地域関係の強化というものは大変重要な方向性となっており、中央アジアのほかの国々との連携を大変重視しております。中央アジアのさまざまな問題を協力して解決していこうという方向性です。ウズベキスタンは現在、中央アジアの全ての国々と非常に緊密な関係を持ち、協力をしています。

それから、私たちにとっても、また中央アジアのほかの国々にとっても、非常に重要な問題となってくるのがアフガン問題です。アフガニスタンからの過激主義や麻薬の流入というものが、地域の安全、そしてグローバルな安全保障にとって、大変大きな懸念材料となっております。この方向性においても、日本と協力させていただきたいと思っております。ありがとうございます。

宇山智彦（モデレーター） スパシーバ。

それでは、次はトルクメニスタンのカシモフさん、お願いします。

グルバンムハメット・カシモフ ありがとうございます。

私が強調したいことですが、トルクメニスタンは中立国といたしまして、この中立国というステータスにつきましては国連でも承認されたわけですが、私たちの国は中立という立場をもって外交を進めております。平和主義にのっとった政策でございます。トルクメニスタンは隣国とも、そして遠い外国とも協力をし、私たちの国の国民のためになるような、そして私たちが協力関係を築こうとしている国の国民のために、外交を進めているわけです。

トルクメニスタンは二国間関係あるいは多国間関係で求めていることというのは、互恵的な関係であるということでございます。これを基本に私たちの国は外交を進めているわけです。そして、私たちの中央アジア地域における日本の役割でございます。

けれども、私たちの国と日本の間には、とても友好的でよい関係がつくられています。トルクメニスタンでは日本の企業が数多く活動しておりますし、投資も行っています。私の報告の中で、幾つかのプロジェクトについて述べたわけですが、実際にあるプロジェクトの数、そしてその総額というのは、もっと多いわけです。

トルクメニスタンは多くの天然資源、石油、ガスを持っています。今後も近隣の諸国、そして遠い外国の国ともよい関係を築いていきたいと思っています。私たちは日本の技術に関心を持っています。トルクメニスタンでガスや石油を加工するような技術というのが必要なわけです。それは中央アジアだけではなく、世界にとっても必要なことであろうと思います。ですから、ぜひトルクメニスタンに来ていただいて、協力をしたいと思っています。

中央アジア全体に関して申しますと、我が国は近隣の諸国ともよい関係を築いております。そして、アフガニスタンについてですが、長年にわたりましてこの国が苦しんでいるということを、私たちはよく知っています。トルクメニスタンは、この国に平和が訪れることを望んでいます。そして、私たちとしてできる限りの支援をしていくつもりです。それは質的な、つまり資金面での支援でもあり、また医療・健康に関する施設をつくるということでもございます。アフガニスタンとトルクメニスタンは国境を接している国であるわけです。

我が国の大統領のすばらしい政策によりまして、全ての国との関係が進んでいくことを望んでいます。その中には日本も含まれます。

ありがとうございます。

宇山智彦（モデレーター） スパシーバ。

次、ディカムバエフさんをお願いしますが、改めて念押しをさせていただきたいのですが、先ほど日本側から発言があった問題に関連させてコメントをお願いします。宮家さんからは、イスラムの将来、それから中国をどう見ているかという具体的な質問もありましたので、その点も含めていただければと思います。

アザマト・ディカムバエフ ありがとうございます。
それでは、それらの宮家さんの質問に答えたいと思います。

まず、中国の役割ですけれども、ここ 10 年、もうちょっと、20 年、25 年でしょうか、中央アジアにおける中国の役割、プレゼンスは高まっています。90 年代初頭から 2000 年代は ODA 分野では日本が中心的なパートナーでしたけれども、現在は中国がその座を占めるようになりました。また、貿易関係を見ますと、3 つの国、つまりロシア、カザフスタン、そして中国、これが我が国にとっての重要なパートナーになります。主に投資を行っている国です。

したがって、中国の役目というのは、中央アジアの中でそのプレゼンスをますます高めていくと思います。1 つ、その理由は明確です。金融的な資金が中国から来るということ。そして、投資に対しても積極的であり、さらに、協力の関係を発展させるに当たって、正直に言うと中国のほうが、よりフレキシブルな相手だということです。したがって、機動的に何かを決めていかなければいけないとき、フレキシブルに問題に対応しなければいけないときに、大変に中国のプレゼンスが高いということです。

次に宮家さんの質問ですが、イスラムについてですが、中央アジアにイスラムが普及したのは 8 世紀のことです。非常に長い時間がそれからたっています。したがって、近代的な中央アジアの国々にとっても、イスラムという要素は大変重要なものであります。中央アジアにとって、イスラムがないということはないわけです。ただ、違う次元でイスラムを見る必要があります。つまり、イスラムの文化というものが、どれだけ中央アジアの人々にとっての文化的・道徳的基準になっているかということです。

歴史を振り返ると、中央アジアの全ての民族は世界のさまざまな民族とつながっております。イスラムの地図の中にも、テュルクの地図の中にもあるわけです。例えば、キルギスには定住民と遊牧民の文化があります。と同時に、最近の傾向としては、多くの中央アジアの住民がイスラムの文化を継承しつ

つも、それが世界にある意味の脅威になっているということも認識しているわけです。

ただ、中央アジアはそれぞれの国の歴史的な役目というものを認識していますし、古代シルクロードで果たしたような役割を新しいフォーマットで果たしていくということも認識しています。新しい世界、つまりシルクロードというのは、中国やアメリカが言うシルクロードのことではなくて、私たちが中央アジアとして、ロジスティックの大きな運輸コリドーの中核をなす重要な役割を果たすという意味でのシルクロードですが、そのような歴史的な役目を認識しています。

したがって、中央アジアのロジスティックの運輸能力というのは上げる必要があり、多くのプロジェクトがあるが、今はその中でもカザフスタン大統領のイニシアティブによる「ヌル・ジョル」というプロジェクトがリードしています。したがって、5 カ国が力を合わせて、さまざまな形でこの新しいランジット、経由地としての役割というものを高めていきたいと思います。

古宮さんがおっしゃったことですけれども、経済については、例えばキルギスについては、冷静にその経済状況を見つめる必要があると思います。2015 年からキルギスはユーラシア経済同盟のメンバーになりました。そして、これが新しい市場を開いたことになりまして、1 億 2,000 万という市場であります。それがキルギスにとって新しい可能性になりました。

次に、本間さんの発言ですが、本間さんはロンドンでお仕事をされたので、キルギスのことをよく知ってくれていると思います。中央アジアをよく知ってくださっていると思います。それに関して一言言えば、EBRD はキルギスタンにとって最も大きな投資金融機関としてビヘイブしてくれました。また、そのほかで言えば、ロシア・キルギス投資ファンドというものができて、5 億ドル規模の投資というものが可能性があり、その中の約 1 割弱が既に投資されているわけであります。

そういう意味で、幾つかの投資をしてくれるため

のスキームがあるわけですが、このような投資会社、投資機関、投資スキームというものが、今後のキルギスタンを支えていくことは言うまでもないと思います。

ありがとうございます。

宇山智彦(モデレーター) ありがとうございます。

それでは続いて、ヌルベックさん、お願いします。

サヤサット・ヌルベック 私も簡単にコメントさせていただきたいと思いますが、まず、この地域における勢力バランスですが、変わってきていると思います。つい最近までは、大変安定した三角形、トライアングルとして、アメリカ、ロシア、中国であったとすれば、今、アメリカは少し手を引きつつあります。オバマ大統領の最後の時代から今に至るまで、徐々に中央アジアから引き上げていく傾向が見られます。そして、新しいトランプ政権ですが、まだまだよくわかりません。まだ決めかねているんだと思います。国務省の中で誰とコンタクトしたらいいのかということも、よくわかりません。

ですから、一定のバキューム、空白地域ができていくということが言えると思います。これまでの三角形から、地政学的にはロシア、中国、そしてこの空白地域に中国は大変積極的に入り込もうとしていると思います。大変多くのソフトパワーを動員しています。私はこのようなソフトパワーの影響ということで幾つかの論文も書いていて、非常に関心があるんですが、このようなゲームのルールの中で、何々嫌いという、歴史的にも文化的にもできてきた中国に対する中国嫌いという感覚はあるにしても、中国文明に対する尊敬の気持ちは大変強いものがあります。

ロシアのマスコミでも、このような中国に対する中国嫌いをあおり立てるような報道の仕方も往々に見られます。でも、経済的ファイナンス上で見ると、中国の影響というものは拡大してきていて、ロシアとは非常に差が開いてきていると思います。

それから、現在の傾向を見ますと、日本の皆さんにも注目していただきたいものがあります。それは、ウズベキスタンが非常に注目を集めているというこ

とであります。政治的にもあります2つの大きな期待があると思います。

まず1つは、経済的なウズベキスタンのポテンシャルであります。まだまだ余地があると。すばらしいプラットフォームをまだ持っていて、今後の飛躍の可能性がある。これまでずっと押さえられてきたばねが大きくはね上がるように、大きな力が開花する時期が来ると思います。また、人口も非常に多いわけですし、市場経済にも非常になれてきているということ。それから、対外負債が少ない。そしてポテンシャルとして、直接投資へのものがあると。そして、カザフスタンのセカンドティアの銀行との関係も、非常に大きく融資を受け入れる可能性があるということです。

それから、経済的・政治的に大きな連携が強まってくるという傾向が中央アジアで見られ、どちらにしましても私たち兄弟国同士ですので、中央アジアでの協力、力の高まりというものは、三角形という観点から見た場合も非常に好ましい方向性であると思われる。

また、宮家さんがおっしゃった、お兄さんと弟という関係ではなく、平等な関係としての関係づくりということ強調されたわけですが、私は日本のソフトパワーはまだ十分に使われていないのではないかと思います。歴史的にも文化的にも、今日全ての専門家が考えていることでありますけれども、日本は絶対にネガティブな感覚を呼び起こすパートナーではないわけです。国民の中にできているこのようなイメージというものは、文化的にも、これまでの伝統的にも非常に大きいもので、非常に大きなポテンシャルとなっているのに、日本は十分にそのソフトパワーを使っていない。映画づくりだとか技術、そしてブランドや、渡辺謙さんなどの俳優さんはとても有名なんですけれども、現在このようなソフトパワーを使うための大きなベースになっていると思います。

一方、中国は非常に積極的です。最近、ジャッキー・チェンが我が国に来たんですけれども、アスタナでとても有名で人気があって、映画なんかもよ

く見られています。マスコミには長いこと、ジャッキー・チェンが来てどうだった、こうだったという情報がいつまでも伝えられました。

それでは、日本との関係を今後どうしていく可能性があるのかということ。まず、ロジスティクスの分野でありますけれども、輸送・運輸の分野ですが、まだまだポテンシャルが使い尽くされていないと思います。日本の会社、特に海運会社でありますけれども、日本の海運業界は世界のチャンピオン、ナンバーワンだと思います。港湾施設、輸送というものは、日本の輸出を支えてきた大きなパワーだったと思います。日本の経済的な軌跡を支えたものだと思います。

でも、今は少し傾向が変わってきています。新しいシルクロード構想では、中国が非常に進出をきており、この陸上の輸送ルートというものは 500 年の時を経て、シルクロード、そしてヨーロッパが海のルートを開発してきたこの期間を経て、またシルクロードに、すなわち陸上ルートに注目が集まっています。これに関連する保険分野ですとか、セキュリティーズの分野とか、そういった分野は非常に伸びてきていますし、またコストの分野、そしていろいろな速度についても、上海からヨーロッパ・ロッテルダムまで海路で 30 日と言われていますが、DB シェンカー、ドイツバンクなどによると……。

宇山智彦（モデレーター） まとめてください。

サヤサット・ヌルベック 今、終わります。もう最後のところを言っているところです。18 日で陸上経由で行けると。これはロンドンに向けての貨物列車を走らせた実績があります。

ですから、今ある事実全てを考えると、この市場、ただいまスターさんも指摘されたように、新シルクロード構想というものは、一带一路ですけれども、非常に注目を集めているということは事実だと思います。そして、ここには日本の運輸・輸送の分野の経験が非常にたくさん使われていると思うのです。ですから、日本もこの分野にもっと目を向けるべきだと思います。

宇山智彦（モデレーター） ありがとうございます。

それでは、ボボゾーダさん。

グルムジョン・ボボゾーダ ありがとうございます。

今日のグローバルな世界においても、貿易についての距離というのは大きな意味を持っています。貿易高ですけれども、これは GDP、そして距離にも比例をしているわけです。私は今日の発言の中でも申し上げましたけれども、中央アジアは統合していかなければならないと思うわけです。その中でキーとなるプレーヤーは、そうしたポイントを理解しなければならないと思います。つまり、市場が統合されていないなければならないということです。

「中央アジア+日本」対話の目標、目的でありますけれども、この対話を通じて、貿易にあるようなあらゆる障壁をできる限り減らしていくということだと思います。また、アフガニスタンの市場も統合し、南へ拡大していくことによって、潜在力がさらに開花するものだと思います。先ほどお話にありましたけれども、今日、私どもの国の大統領は中国へ行っておりまして、およそ 20 の文書に署名することになっています。これは、わずか 1 年半の上になされたことです。

そして、安倍首相が私たちの国を訪問された後、私たちの国からも訪問していくということになるかと思います。このグローバルな世界において、協力のテンポというのは速くなければならないと思うわけです。そうした中で、私たちは作業を続けていかなければならないと思いますし、中央アジアと日本との関係が、常に協力に対してオープンなものになければならないと思います。

上海協力機構についてですけれども、現在そこにインドが加盟し、パキスタンが加盟し、イランも加盟しようとしています。また、オブザーバーである国々・地域もございまして、その中で中心的な役割を果たしている中国についても、中央アジア地域で大きな影響力を果たそうと試みているわけです。

私たち中央アジアの国というのは、全てオープンドア政策をとっていますし、できるだけパートナーを多角化したいと思っています。ですから、ロシア、EU、中国、日本などとも協力していくわけです。で

すから、中央アジア地域におけるプレゼンスを高めるために、そしてユーラシア大陸においてプレゼンスを高めるために、いろいろとやっていただかなければならないのだろーと思います。

かつてシルクロードは最も大きな貿易路であったわけですが、これが今、再興しようとしています。それを私たちは今、目にしているわけです。私たちはそれに追いつかなければならないと思います。列車はすぐに行ってしまうわけですから、そこに追いつくようにスピード感を持っていかねばならないと思います。中央アジアの皆様にご成功をお祈りしたいと思います。お互いに協力をし合い、そして日本とも協力をし合っていく、その中での成功を祈りたいと思います。

宇山智彦 (モデレーター) スパシーバ。中央アジア側からの答え、どうもありがとうございました。

ここまでの議論を聞いた感想を少し述べたいと思いますが、日本側からは、中央アジアとの関係におけるさまざまな取り組みをお話いただきました。私は中央アジアのことを勉強し始めたのは、ちょうど 30 年前、1987 年で、初めて中央アジアに行ったのは 1989 年、中央アジアがソ連の一部だったときです。そのころ、あるいは中央アジア諸国が独立してすぐのころというのは、日本と中央アジアの交流はほんとうにわずかでした。

この 25 年余りの間の関係の発展というのは、おそらく普通に持たれているイメージ以上に大きいと思います。日本のいろいろな役所や大学その他で個別に交流を持っているので、関係者同士でさえ、お互いに何をやっているか必ずしも把握していないところがありますが、それを合わせて日本と中央アジアとの関係全体を評価する必要があると思います。

中央アジア側からは、いろいろなお話の中で、特に中国が現在非常にダイナミックに動いていて、日本はもっと柔軟かつ機動的に動くべきであるというご指摘もいただきました。中央アジアの方々と話をすると、すぐに日本と中国は比較されます。しかし日本側から見ると、別に日本は中国と競争するために中央アジアと関係を持っているわけではありません。

中国は非常に速いテンポで経済成長をしている。そのテンポを落とすと国内のさまざまな問題が噴出するという危機感を持っています。それを防ぐために、世界のいろいろな国々、特に近隣諸国と経済関係を大きく発展させる必要があります。そしてそのことは、特に中央アジアと接している新疆ウイグル自治区の安定を保つという問題ともかかわっています。

ですから、中央アジアとかかわる動機は、日本と中国とは全く違います。日本は伝統的なアジア外交の一環として、また日本が国際舞台で発揮するさまざまなイニシアティブを支持していただける国を少しでも増やすということで、中央アジアを重視しておりますが、競争するためにやっているわけではないと私は理解しています。

ただ、経済関係が政治交流や文化交流に比べて発展していないことへの中央アジア側からのご意見というのは、非常によくわかるものです。特に、日本企業が慎重過ぎる、リスクを恐れ過ぎるという指摘をしばしば受ける。それはもっともだと思いますけれども、ただ、同じくリスクが多いとされていたロシアへの日本の投資は、近年非常に大きく伸びています。中国からロシアへの投資より、日本からロシアへの投資のほうがはるかに多いんです。なぜ日本とロシアの経済交流は発展して、中央アジアとは発展していないのかということは、別途考える必要があると思います。

そのあたり、日本側のパネリストから、またご意見をいただきたいのですが、既にかなり時間が押しておりますので、このあたりでフロアを開いて、フロアの皆様から質問、コメントを集めて、その後で日本側パネリストから再びご発言をいただきたいと思っています。

それでは、フロアからのご質問、ご意見のある方は、挙手をお願いいたします。

それでは、豊原さん。

豊原行宏 (イノYEARL・プロジェクトリーダー) ご指名いただき、ありがとうございます。今回、一般参加者という立場であります。実は今、私の中央

アジアとのかかわりは、現在カザフスタン共和国の首都アスタナで開催中の万国博覧会、EXPO 2017 Astana のインターナショナルボランティアという形です。今、たまたま日本に1週間ぐらい帰国中です。日本館、ジャパンバビリオンのスタッフではなくて、現地の運営のボランティアをしています。そんな珍しいことをするのは自分ぐらいかなと思っていたんですが、実はもう1人か2人ぐらい物好きな学生がいて、筑波大学の男の子とかは新聞記事にもなっているみたいなので、ぜひインターネットなんかで調べてみたら、彼の記事も出てきます。

質問を用意してきたんですけども、中国の影響に関しましては既にパネリストの皆さんが十分に議論なさっていると思うので、時間も押していますから割愛します。1つだけ、アスタナで一ヵ月ぐらい暮らしてみた自分の中国の感想を言いますと、やはり影響力は強いなと思いました。中国の資本で高速鉄道を今建設中ですし、また、カザフスタンの大手の銀行のATMに自分の銀行のカードを入れますと、現地語のカザフ語、あとロシア語、英語のほかに、中国語のメニューも既にありました。残念ながら日本語はありません。

アスタナ万博について自分なりの感想を言いますと、残りあと10日ぐらいで終盤に差しかかっていますが、おおむね成功していると思います。またホスト国として、カザフスタンの運営の方々、政府関係者の方々を含めて、あるいはボランティアの若い学生たちも非常によく頑張っていて、すごく上できだなと。非常にニュートラルなんですよね。どことは言わないですけども、2回前に万博をホストした国というのは、ほとんど万博を国威発揚のために利用していただけだなという感想しか私は持ちませんでしたから。2005年の愛知の万博のときは、僕は学生のアルバイトとしてイベントの会場にいたんですけども、それと比較しても全然遜色がない。カザフスタンの人たちは非常によくやっていると思いました。

宇山智彦(モデレーター) 発言は手短かにお願いします。

豊原行宏 はい。じゃ、もうこれでいいです。

宇山智彦(モデレーター) 続いて田中さん、お願いします。

田中哲二(中央アジア・コーカサス研究所所長) 議長、どうもありがとうございます。簡単に3点だけ申し上げます。

1つは、私は24年間中央アジアにかかわっておりますけれども、2004年のときに川口外務大臣に呼ばれて、これからの中央アジア外交をどうしていくかという話をしたときに、特に経済面では、5カ国と日本とのバイの関係は非常によろしいんです、とにかく現地に行けば。ところが、5カ国が経済開発について足並みがそろっているかどうかということは、資源の偏在も含めて、なかなかうまくいっていない。ですから、5カ国に対して共通するようなプロジェクトを提案するとか、現地でも協力できるプロジェクトがあれば、その最大公約数のところを日本が支援するというのが非常に大事だったと思うんですね。

今それが、JICAも頑張ってくれていますけれども、5カ国に共通するようなプロジェクトがまだ少ないんじゃないかと。これは国際金融機関なんかも含めて、それは日本政府にも、少しアシストしたらいいんじゃないかと思っています。

2つ目。中央アジアが経済的にある程度の共同体的な物を持つのは、これから21世紀を中央アジアが経済的に生き延びるためには、非常に大事なことだと思うんですね。したがって、中央アジアのCACOというのがあまりうまくいっていないと当時から私は感じておりまして、CACOにかわるような中央アジアの経済共同体というのものなるべく早くつくらなきゃいけないと。

そのときに、一番大きな足かせになっているのは、水資源問題の解決というのがなかなかうまくいっていないんです。これは政治問題化しちゃって、なかなかうまくいっていない。先ほどタジクとウズベクは最近、貿易が2倍になったということで、関係がよくなりつつあるという感じを受けていますので、上流国と下流国がもう少し国際機関なんかも巻き込

んでもっと話し合って、具体的に解決する方法が出ると、中央アジア全体の経済的インテグリティに対して意味があるんだろうと思います。

それから、もし可能であれば、もう1点だけ。既に語り尽くされている面はありますけれども、中国が一带一路運動で中央アジアを非常に重要視していると。一方で、もちろんロシアもユーラシア経済共同体で、中央アジアというのは非常に大事な地域だと思っています。この2つの経済共同体構想というのは、ロシアのやつはどちらかというとシベリア開発だとか極東開発ということで、ベクトルが東へ向いているわけですね。

中国の一带一路という戦略というのは、どちらかというと西ないしは南にベクトルが向いている。その間にモンゴルと中央アジアと、トルコあたりまでそうですかね、それが挟まって、その2つの大きな戦略を、どういうふうに自分たちの国のために利用していくか、引き込んでいくかというあたりを、さっきもうしゃべったかと思われまいますが、もう一回その辺のロシアの戦略、それから中国の戦略に対して、どういうふうに使い分けをしていくかというあたりを、もし可能であればお示し願いたい。

どうもありがとうございます。

宇山智彦(モデレーター) ありがとうございます。

ほかにご質問、ご意見のある方。

ウスモノフ・ファルフ(アジア人口・開発協会国際課主任研究員) ありがとうございます。人口・開発協会事務局の者です。質問したいんですけども、日本の中央アジア、例えばタジキスタンに対する投資というのはそんなに多くないと思います。「中央アジア+日本」対話の枠内でビジネスフォーラムを開催し、JBIC、ジェトロ、ジャパンアグリカルチャー、またJTBなどのツアーカンパニーを入れて、これをもっと積極的にやっていいのではないかと思います。

宇山智彦(モデレーター) ありがとうございます。

それでは、ここで日本側パネリストから再び、ここまで出てきた話題に関するコメントをいただきたいと思います。

順番を変えまして、本間さんからお願いいたします。

本間勝 最初に、田中さんから話のありました中央アジア地域協力ですね。これはなかなか難しい話で、私も CAREC という、一番おそらくファンクションしている地域経済協力フォーラムに、いつも参加しておりまして、中央アジア地域経済協力フォーラムなんですけれども、これは ADB が事務局をやっておりまして、4 つテーマがあります。

1 つは地域交通インフラ。これは非常にうまくいっています。地域共通インフラを整備するときに、これがベースになって、重要な地域プロジェクトは大体このプライオリティーを参考にして、お金を出しています。一方で電力、水は、ほとんど話が前に進みません。ご存じのように、上流国、下流国の利害調整がほんとうに難しいのです。特にお話のありました2つの国が、今後どういうふうに行っていくかというのが極めて重要なと思います。

それから、トレード・ファシリテーション。これは何をやっているかということ、通関の施設を改善するとか、具体的な話で、国際関税機関(WCO)という機関がブラッセルにあるんですが、私の同期がトップをやっておりまして、これはかなり中央アジアに入り込んで、技術的なファシリティーの改善なんかで協力しております。CAREC はあと、トレードポリシーの調整をやっています。ただし、CAREC は基本的には、運輸インフラの改善のプラットフォームとして非常に有効だと思っております。こういうのがもう少し出てくると、地域協力がもっとすすむかなと思います。

それから、ロシアですけれども、ロシアのユーラシア経済同盟については私もずっとウオッチしてまして、これは今のところは経済同盟、自由貿易協定といいたいでしょうか、関税同盟といいたいでしょうか、そういう性格の組織です。今のところ、キルギスタン、アルメニアが新しいメンバーで入って、アルメニアの大使に聞いたら、アルメニアのほうはうまくロシアに輸出できているとのことでした。

キルギスタンは当初、輸出・輸入で大混乱したと

聞いております。これはおそらく準備がちょっと不足していたかなと思うんですが、これをうまく使っていくと、1億8,000万人の人口を抱える大経済圏ですから、キルギスタンという小さな国をベースに、賃金が相対的に安いですから、大変な生産基地になっていく可能性はあると思います。

タジキスタンが今後どうするかというのは、私は非常に注目しているんですが、このぐらいでとどめたいと思います。どうもありがとうございます。

宇山智彦(モデレーター) ありがとうございます。

それでは古宮さん、お願いします。

古宮健一郎 古宮でございます。お話に出なかったことで、各国の方が一回チェックをなさったほうがいいなと思うのは、決してキルギスではないんですが、実は何年か前に中央アジアの国へ、ほかの国のことで投資を考えたことがあったんですが、たまたまそのとき、通貨の混乱もあったということもあって、外貨規制。これは中央銀行の政策なんですけれども、こういうところで外貨の持ち出しをストップされるとか制限されるということが、過去に見受けられました。

そういうのがありますと、先ほども日本の企業の投資スタンスは弱いというお話もあったんですが、そういう投資したお金、例えば配当一つとっても、利益が出たら当然配当は取れるわけですが、そういうものが持ち出し制限されたりするというのは、投資する側の国から見たときに、やはり手は少し伸びなくなりますよね。

そういうところ、いわゆる国の政策として、もちろん中央銀行の政策というのはあるんですが、やや特殊なボックスに入っているんで、なかなか政治の人たちに見えない部分があると思いますので、ぜひ、国の発展をお考えいただくんでしたら、先ほど例えばビザの問題とかもありましたけれども、あるいは経済特区の税制の問題もありましたが、やはり通貨持ち出しが、為替が絡んでいるときにストップされちゃったら、後で大きな為替差損が出たり、いろいろなことが起こっちゃうわけです。そういうことの、いい意味で海外の投資家が怖がらないようなコント

ロールを、中央銀行がほんとうにしているのかというのは、チェックをぜひお願いしたいなと思います。以上です。

宇山智彦(モデレーター) ありがとうございます。

それでは宮家さん、お願いします。

宮家邦彦 ありがとうございました。短めに、中国とイスラムについて私はお話を伺って、非常におもしろかった。一部の方は大変率直に話していただいて、これが全てだとは私は思いませんが、今日私が感じたことは、まず行間から、中国に対する期待と懸念というものがまじり合っているような気がいたしました。もし違っていたら教えてください。

それからイスラムについては、これも非常に含蓄のあるお話がありました。そして、私も向こうへ行ったときによく聞かされた、イスラムは自分たちにとっては文化であるという言葉が今回も出まして、非常に印象的でした。しかし、イスラムは文化ではないんです。イスラムは神との契約なんです。イスラムは神との契約であるということを、中央アジアの方々はいずれ知られるときが来るかもしれません。

以上です。

宇山智彦(モデレーター) ありがとうございます。

中央アジア側からもご発言いただきたいのですが、時間が既に過ぎていきますので、5人全員にお話いただくことは……。

田口精一郎(司会) 宇山先生、フレデリック・スター先生に。

宇山智彦(モデレーター) それでは、先にフレデリック・スター先生にご発言いただきます。

フレデリック・スター 短く一言言います。誰もこの席で、非常におもしろい点があるのに、それに触れないことです。それは投資ですが、中央アジアに対する投資が、日本からの投資の可能性が大きいということです。これは、ハードインフラストラクチャーについてです。

とてもおもしろいと思えるところは、例えば誰がホテルを建てるか、そしてどういうホテルにするか、

またどういう会社がロジスティックを運営するか、また運営の仕方を教えるか、これはとても大事な点なんですけれども、その点についてどなたも触れていないし、またこれは、今後日本と中央アジアの関係を大きく広げていくための地平線が開かれていく分野だと思うんですね。でも残念ながら、今日はそのことについて話し合いがされていない、話題にならない。これはとても残念です。経済だけではなく、将来の中央アジアの主権をどう守っていくかということにもかかわってくる問題ですからね。

ですので、私は強調したいんです。中央アジアの役目というのは、歴史の中で常にアクティブだったんです。そのことをどうか忘れないでください。

宇山智彦(モデレーター) ありがとうございます。中央アジアの役割というのは受け身ではないというご発言は、大変重要だと思います。

それでは、中央アジア側から、全員お話しただく時間はありませんけれども、1人か2人、ご発言いただきたいと思います。ボボゾーダさん、お願いします。特に水問題が挙げられましたから、その点についてのご発言を含めていただけると助かります。**グルムジョン・ボボゾーダ** ありがとうございます。そのことについてお話をしたいと思っていたところです。

水力発電ですけれども、これは環境に優しい再生エネルギーでございます。1キロワットの電力を得るために、4キログラムの石炭を焼かなければならないわけですよね。これは大きな資源であります。つまり、タジキスタンには大きなエネルギー源がありまして、水力エネルギーがありまして、それによって電力を発電することができるわけです。そして、今建設を進めている水力発電所について、国際的な監査をいただいたわけですが、それについての回答は肯定的なものでございました。

タジキスタンは、水力発電というものを自国のためだけに使おうとは思っていません。しかもこのプロジェクトは、タジキスタンで生まれたものではないわけです。そして、消費は隣国でも行われていくわけなんです。ウズベキスタンとの貿易高が2倍

に上がったということですけれども、またタジキスタンだけではなくて、キルギスタンについても上流国であるわけですね。私たちのこの水力発電を自国のためだけではなく、地域全体のために使えば、これは人類のためにもなるだろうと思います。そして、これがアフガニスタン、パキスタンにエネルギーを供給するということも可能なわけです。

もっと時間があり、議論ができれば、この問題が私たちの関係におけるつまずきの石だったかは、今の問題ではないのかなと思います。そして、水力発電というのは大きなポテンシャルである可能性があると思いますし、それを使っていかなければならないと思います。

宇山智彦(モデレーター) ありがとうございます。

もしあともう1人、発言されたい方がいれば、していただきたいと思いますが、いかがでしょうか。中央アジア側から。

では、ディカムバエフさん。

アザマト・ディカムバエフ 私は今のお話をずっと聞いていて、ここ数年、中央アジアの国々が非常に近づいてきていると、そして、一緒にプロジェクトをやっているという機運が高まってきていると思います。それで、今ボボゾーダさんがおっしゃったのに加えて、CASA のプロジェクトがあって、これは中央アジアに対する非常に大きなエネルギープロジェクトになっています。また、ユーラシア経済同盟の枠内で、統一エネルギートレーディングブレースという構想があります。これは、電力の生産を大きな電力市場につなげていくというものであります。

このような方向性で、中央アジア全土にかかわる大きなプロジェクトを行っていく、これを二国間関係、また多国間関係のもとに実施していくという可能性があると思います。そして中央アジアの国々も、さらに建設的な対話を求めている機運があるということも申し上げます。

宇山智彦(モデレーター) どうもありがとうございます。

先ほどから出ていますように、「中央アジア+日本」対話が大きな目的としてきた中央アジアの中の

地域協力の発展が、中央アジア諸国自身の動きによって、最近急速に改善・発展しつつあるということは、大変喜ばしいと思いますし、それによって日本が中央アジア諸国と協力を進めることもさらに容易になり、いろいろな可能性が出てきたのではないかと思います。

それでは、パネルディスカッションの部分をこれで終わりにいたします。どうもありがとうございました。(拍手)

田口精一郎(司会) 宇山先生、ありがとうございました。

皆様、ご発表、ご意見、ご質問、ありがとうございました。

それでは最後に、外務省中央アジア担当特別代表(大使)の相木俊宏より、本日の第10回東京対話を総括させていただければと思います。

相木大使、よろしくお願いします。

(3) 総括

相木俊宏(外務省欧州局審議官・中央アジア担当特別代表) 外務省中央アジア担当特別代表の相木でございます。今日は中央アジアからいらしていただいた皆様、各パネリストの皆様、スピーカーの皆様、それから会場にいらしていただいた皆様、多くの意見をいただきまして、まことにありがとうございます。議論は非常に多岐にわたりましたので、一言で総括するのはなかなか難しいところではありますが、今日さまざまな出ました議論について概観をして、総括にかえさせていただきたいと思います。

今日の「中央アジア+日本」対話・東京対話のテーマは、日本・中央アジア関係の今と未来を展望するというので、外交関係樹立25周年の節目に当たり、これまでを振り返り、そしてこれからを見通すというテーマでございましたけれども、各スピーカーの皆様からもさまざまな角度から、切り口からご意見をいただき、またご質問、ご回答などもいただきました。

幾つか切り口があったかと思いますけれども、1つには、これまでの各国の独立以来の国づくりにお

ける成果。容易でない面も少なからずあったかと思えますけれども、経済面にせよ、人材育成面にせよ、政治面にせよ、さまざまな発展を遂げてきたということが報告されました。また、それとも関連して、特に中央アジア諸国間の地域協力の意義ということについて、その必要性の認識、また実的な可能性というものがますます高まっているということが、中央アジア諸国の参加者の側からも、また日本の参加者の側からも指摘をされたということではないかと思えます。

それとの関連では、域外のさまざまな国際社会のパートナーとの関係も議論されました。ロシア、中国、EU、アメリカ、インドといった多くの国の名前も挙がりましたし、そういった国際社会のパートナーとの関係を含めて、どのように中央アジアの地域が発展していくかという点についても議論されたということだと思います。

そのような域外パートナーの一つとして、日本があるわけではありますが、中央アジアと日本との関係、25周年ということで申し上げましたけれども、それに限らない、もっとさかのぼった2千年にもわたるさまざまな長い日本と中央アジアの関係、歴史についても指摘をしていただきました。議論をしていただきました。日本人にとって心情的にも、また遺伝子に根差したというご発言もありましたけれども、そういった長い歴史にわたる親しみといったものが背景にあるということであろうかと思えます。

「中央アジア+日本」対話につきましては、川口元外務大臣より、当時「中央アジア+日本」対話を立ち上げたころの具体的なエピソードを交えて紹介をいただきました。当時の問題意識、そしてそれは現在にも通じるところが少なからずあるのだと思いますが、「中央アジア+日本」対話の枠組みを活用しながら、ODA、人材育成、さまざまな観点でこれまで日本と中央アジアの間で協力をしてこられたということだと思います。

また、中央アジアと日本が協力する、そのことについては、それ自体として理由があるということ、第三国に向けられたものではなく、日本と中央アジ

アの長い歴史的な関係の中で、また背景の中で、関係を発展させていく理由、むしろ発展させない理由を見つけることのほうが難しいという指摘もございましたけれども、そういった背景のもとに日本と中央アジアが関係を深めていく理由があるのだということについても、指摘がなされたということではないかと思います。

また、今後の協力につきましては、さまざまな可能性のある分野が指摘をされました。経済面、特に今日は金融面についても幾つかの点で焦点が当たったかと思いますが、ロジスティクス、面、「中央アジア+日本」対話においても実践的協力として、農業、運輸・物流といった分野が近年、具体的な協力分野として指定されながらやってきているということも指摘をされましたし、またその過程で、日本の果たせる役割についても議論がなされました。

今後につきましても、政治的な面での協力、政治対話、高いレベルでの人的な往来ということもそうですし、またビジネス面の投資を含めた経済分野での協力、それから経済協力、日本としては ODA というツールを持っているわけではありますが、そのツールも活用しながらということで、いかによりよい役割を果たしていけるかということだろうと思います。

また、文化面、ソフトパワーの重要性、日本のソフトパワーが十分に活用されていない、まだ活用の余地があるという指摘もございました。こういった面、また大学、研究所、あるいは地域間交流、姉妹都市の関係はまだまだ多くはありませんけれども、そういった点についても、今後に向けて可能性があるということではないかと思います。

このような背景のもとに、今後さらに日本と中央アジアの関係が発展していくことを願っておりますし、外務省としても役割を果たしていきたいと思えますし、多くの皆様のご協力をいただきながら、また、それぞれの分野でのご活躍をお願いしながら、今後の 25 年、さらにはそれを超えた長い今後の発展に向けて、今日は非常に活発な、よい意見交換をしていただけたのではないかと思います。(拍手)

田口精一郎(司会) 相木代表、ありがとうございました。

それでは、これをもちまして、「中央アジア+日本」対話の第10回東京対話を閉会させていただければと思います。

—— 了 ——

Ⅲ 付 録

1. 報告資料	43
2. 本「対話」に関するメディアなどの報道	59
3. グローバル・フォーラムについて	64

1. 報告資料

グロムジョン・ボボゾーダ・タジキスタン大統領府国際局長



TRADE AND ECONOMIC COOPERATION

- ☐ Tajik – Japanese intergovernmental commission on economic, technical, and science cooperation, formed in 2017.
- ☐ In August 2006 Japanese International Cooperation Agency (JICA) opened its office in Tajikistan.
- ☐ On 22 September 2011 the first Tajik-Japanese joint pharmaceutical company "Avvalin" was launched in Kabadiyan district of Khatlon region.
- ☐ Financial assistance of Japan in implementing important infrastructure projects in economic and social sphere.
- ☐ The trade turnover between the countries is at the stage of gradual growth.

JAPAN – TAJIKISTAN: In context of regional cooperation

PROSPECTS FOR DEVELOPMENT OF TAJIK-JAPANESE RELATIONS

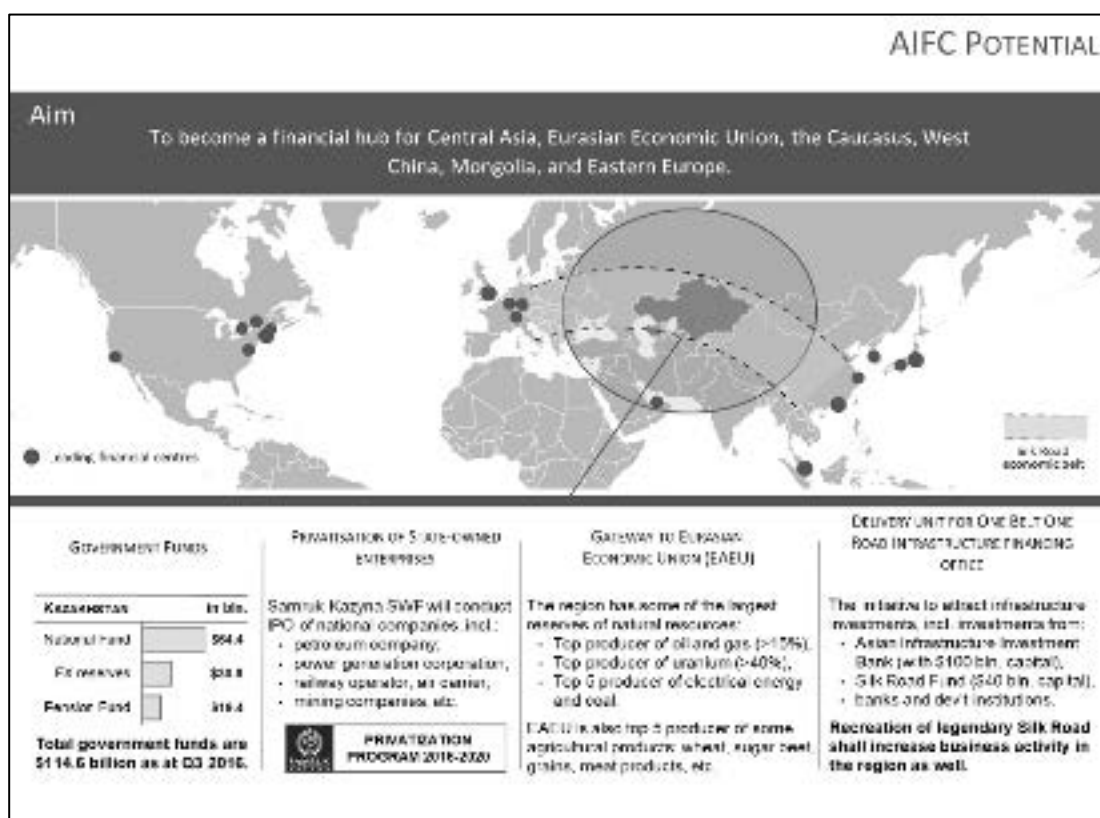
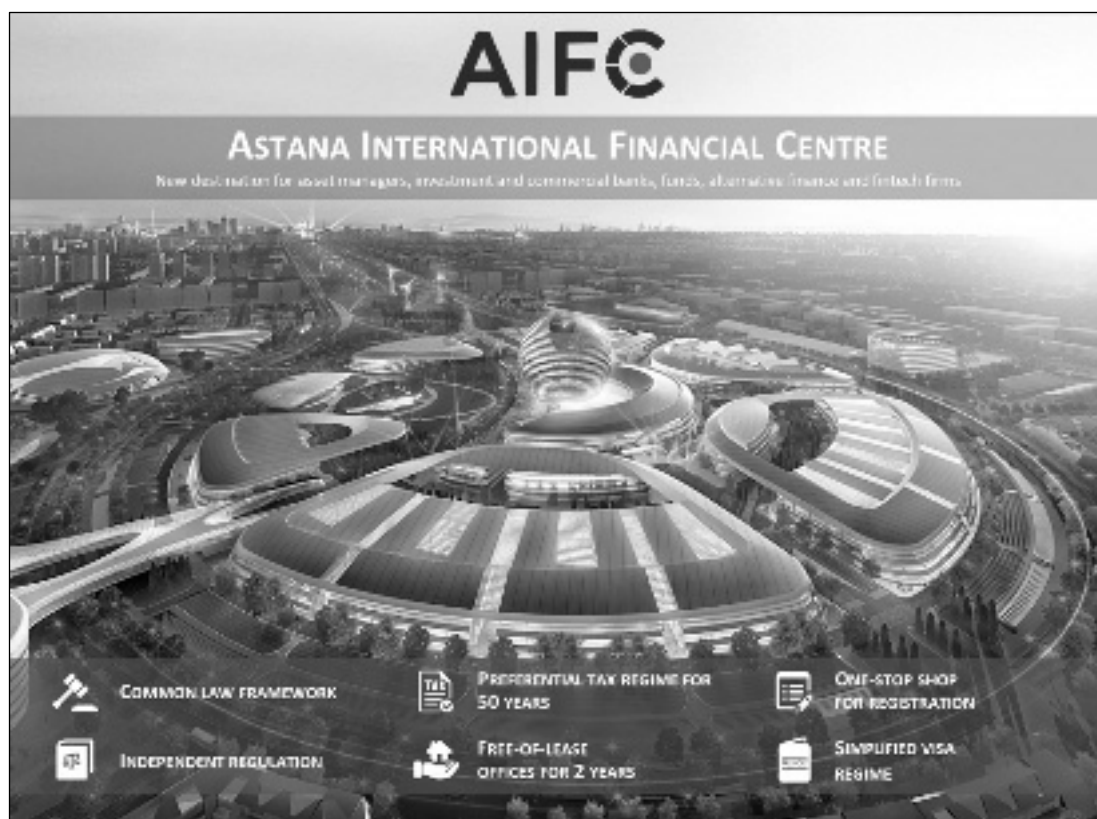
- ☐ Development of bilateral cooperation.
- ☐ Cooperation within the framework of the international organizations.
- ☐ Cooperation in financial, trade and investment.
- ☐ Development of relations through Central Asia plus Japan Dialogue.
- ☐ Promoting cooperation in the sphere of tourism.
- ☐ Development of cooperation in the fields of education and science.

JAPAN – TAJIKISTAN: In context of regional cooperation

Thank you for your attention!

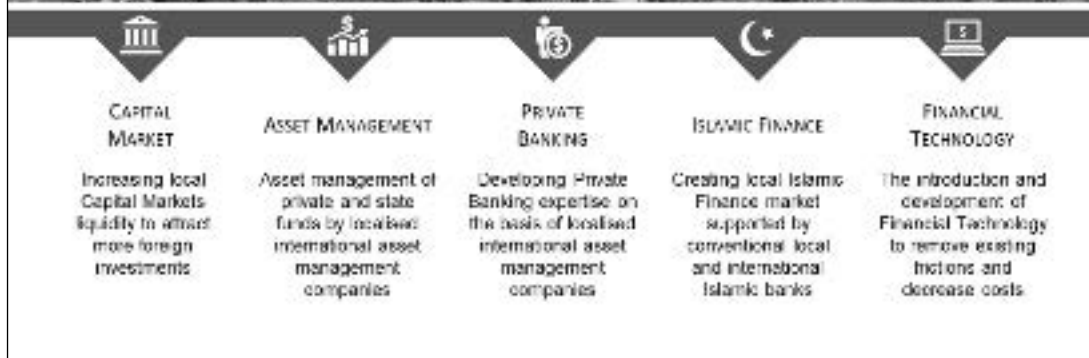
JAPAN - TURKISTAN In context of regional cooperation

【The End】

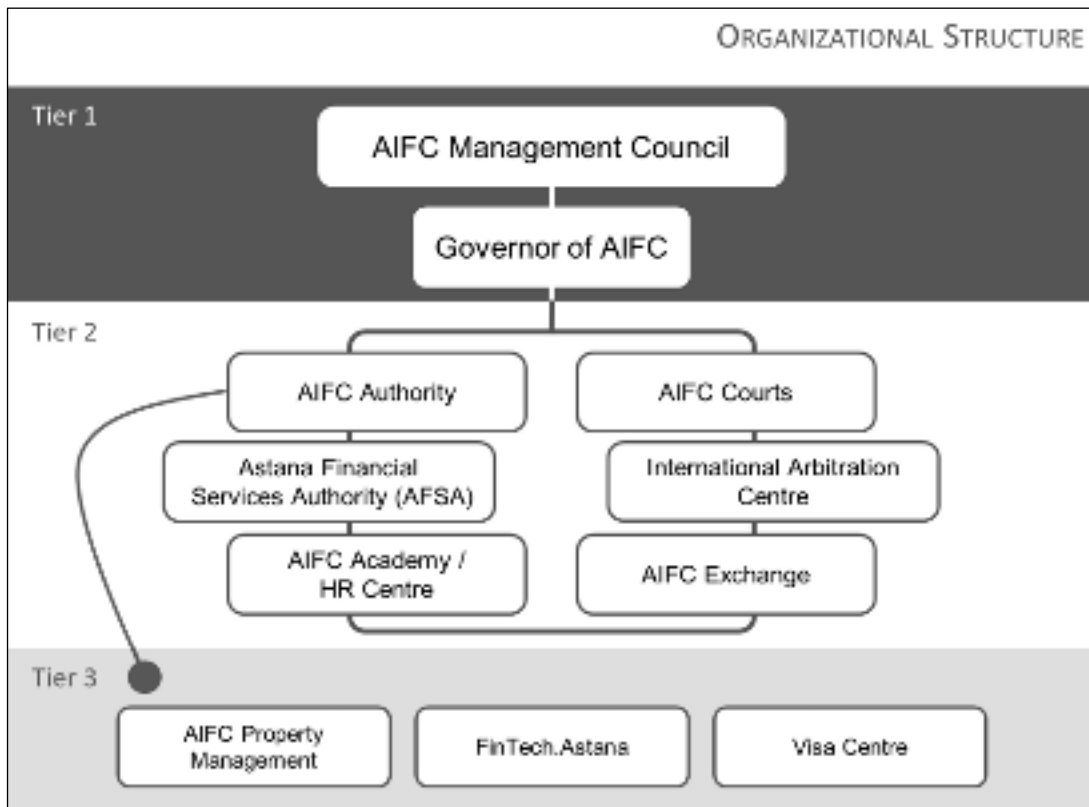


CORE PILLARS OF AIFC DEVELOPMENT

Positioning Astana as a main financial centre in the region shall be achieved through the implementation of the following five core pillars:



ORGANIZATIONAL STRUCTURE



ASTANA INTERNATIONAL FINANCIAL CENTRE

AIFC shall first become a local centre of expertise with developed capital markets that provides new financial instruments and supplements the domestic banking sector.

SPECIAL TREATMENT AT AIFC

PREFERENTIAL TAX REGIME

50 year waiver for corporate tax, individual income tax, property tax, land tax (till end of year 2055)

REGISTRATION

AIFC implements one stop shop - visa issuance, registration, work permits and other AIFC-related procedures all located in one place.



FREE-OF-LEASE OFFICES

Free-of-lease office space for AIFC participants for the first 2 years (till end of year 2019).

SIMPLIFIED VISA REGIME

AIFC provides visa waiver up to 30 days for visitors from OECD countries, UAE, Malaysia, Singapore, and Monaco. AIFC participants and their family members will enjoy special visa regime with extension up to 3 years.

Favourable business environment is created at AIFC to attract investments and best talent from across the world.

WHAT TO EXPECT



STAGE 1

Local centre of expertise



STAGE 2

Regional financial intermediary market



STAGE 3

Regional financial centre



STAGE 4

International financial centre

AIFC CONNECTIVITY

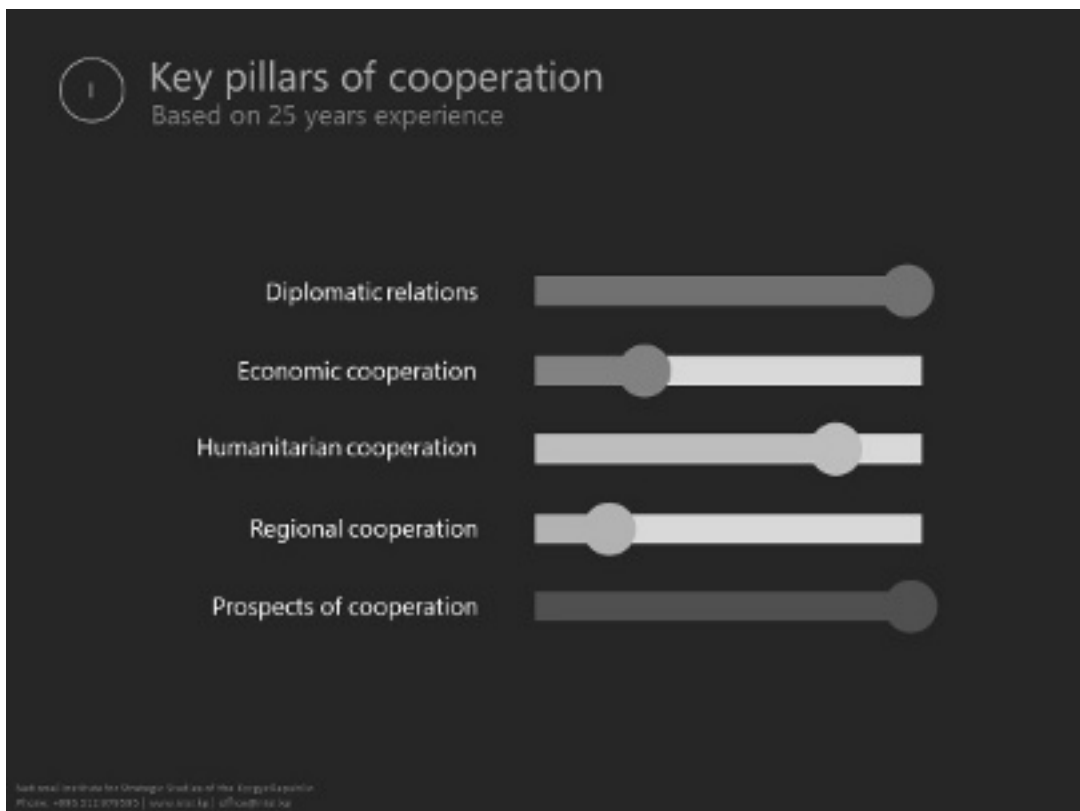
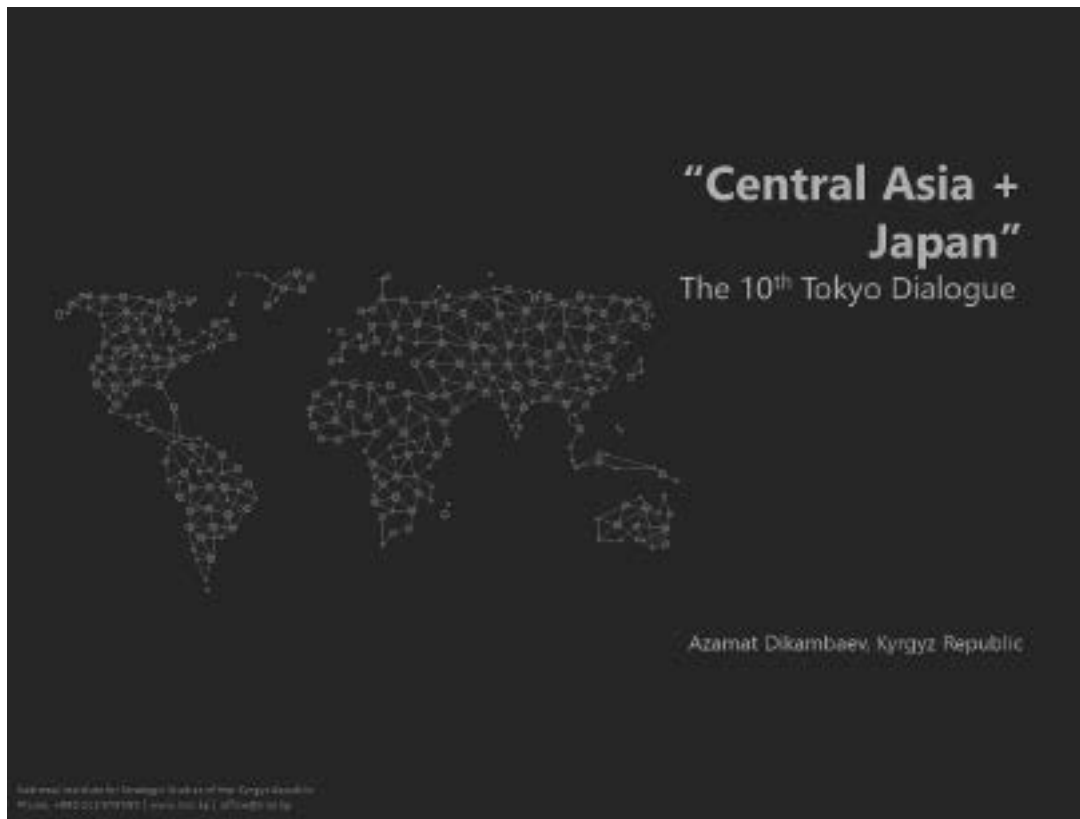
Ensuring accessibility to AIFC by establishing direct flights from Astana to leading financial hubs is a part of the "100 Concrete Steps" Presidential initiative.



Astana is already connected with direct flights to Frankfurt, London, Vienna, Paris, Seoul, Bangkok, Beijing, Istanbul, Abu Dhabi and Dubai. In the next few years the government aims at connecting with Hong Kong, Singapore, Tokyo, Zurich, New York and Shanghai. It will be done through a phased liberalisation of air traffic at Astana airport to foreign carriers on the principle of Open Skies.

【The End】

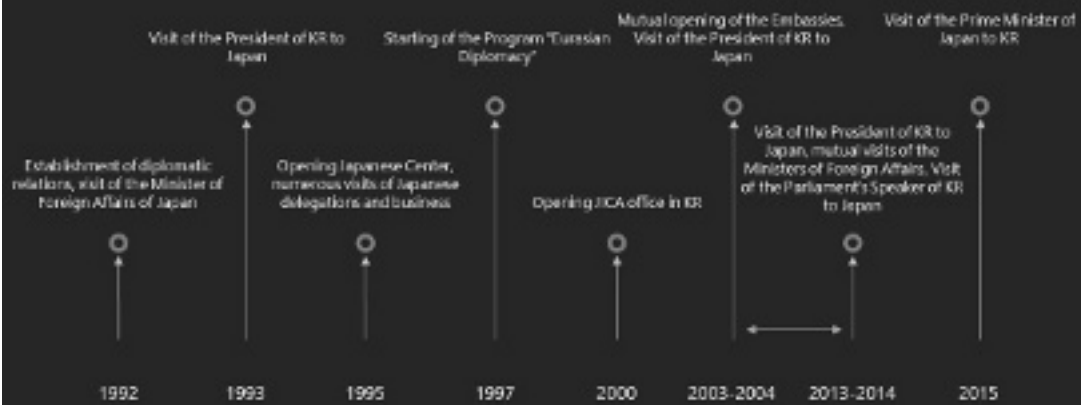
アザマト・ディカムバエフ・キルギス国立戦略調査研究所所長



II

Diplomatic relations

Open dialogue and cultural understanding

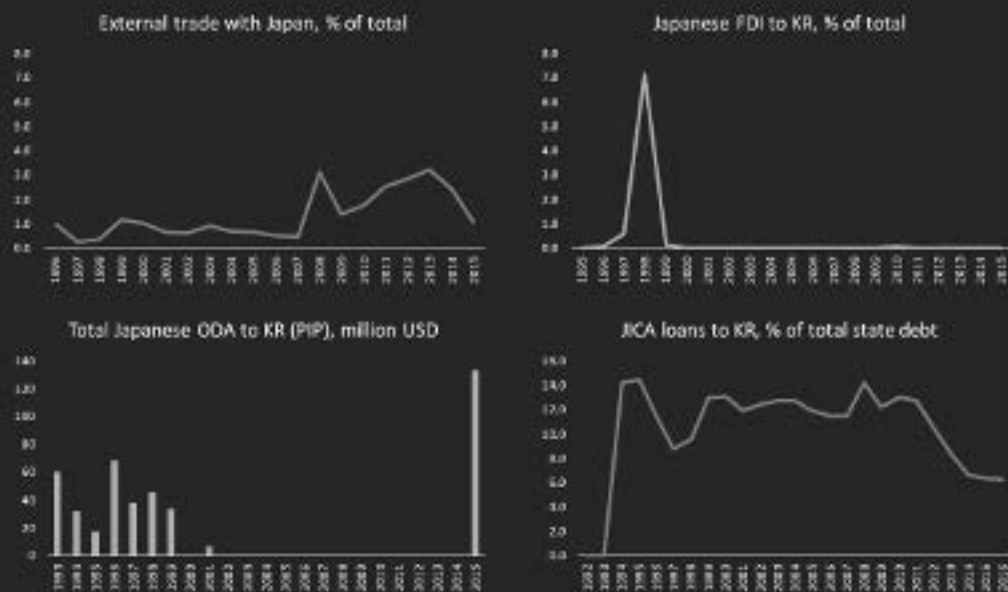


South Korea Institute for Strategic Studies of the Foreign Republic
Phone: +82-2-3771-0000 | www.kiss.go.kr | office@kiss.go.kr

III

Economic cooperation

Unrealized opportunities



South Korea Institute for Strategic Studies of the Foreign Republic
Phone: +82-2-3771-0000 | www.kiss.go.kr | office@kiss.go.kr



Humanitarian cooperation

Feeling of sympathy



Mutual cultural attraction



Education and HR development



Sharing of health care experience



Parliamentary cooperation



History scientific cooperation



Assistant to rural development

National Intellectual Strategic Studies of the Kyrgyz Republic
Phone: +996 312 970005 | www.nis.kg | office@nis.kg



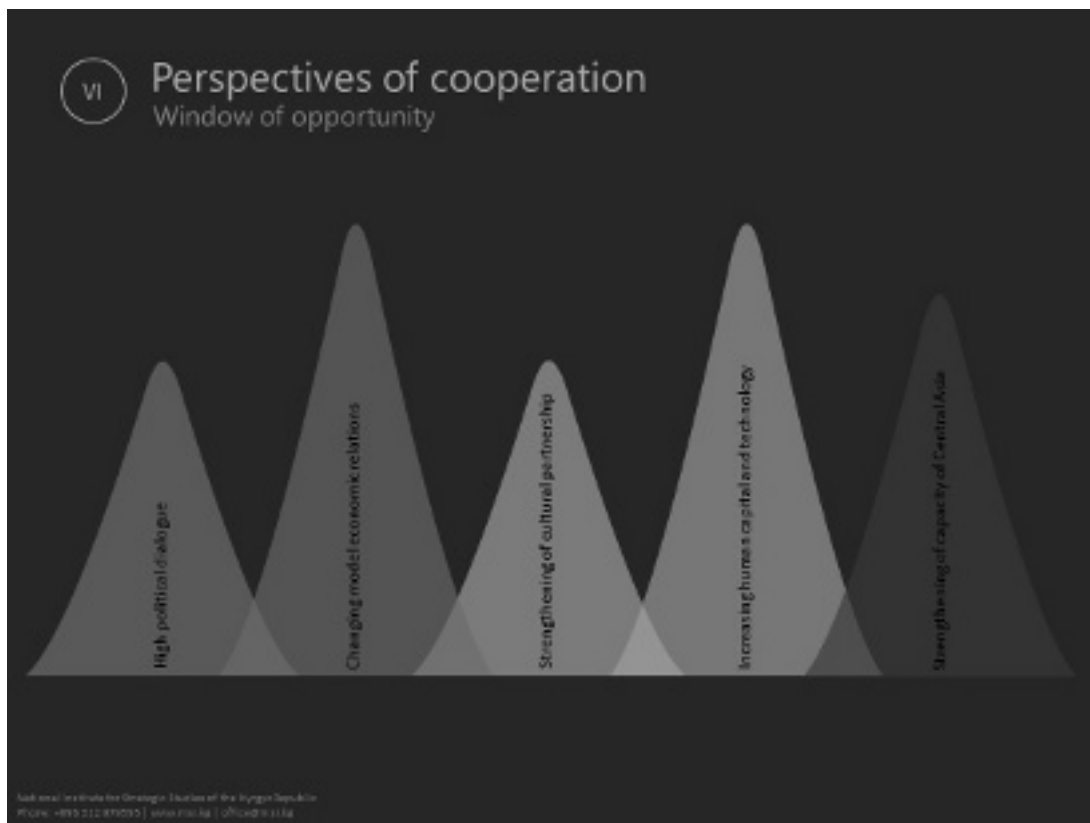
Regional cooperation

Dialogue "Central Asia + Japan"



- Initiative of Japan, 2004
- 5 stage of dialogue
- Multilayer structure
- Central Asia and its strategic role
- Integrity of Central Asia (economic, security, infrastructure, cultural, political)
- Bilateral or regional model of cooperation
- New circumstances in Central Asian countries
- Global initiatives of key players and its influences

National Intellectual Strategic Studies of the Kyrgyz Republic
Phone: +996 312 970005 | www.nis.kg | office@nis.kg



【The End】

10th Tokyo Dialog

Implementing the agreements reached at the
6th Meeting of Foreign Ministers



High-Level Visits

- 2009, 2013 and 2015 -
President of Turkmenistan
visited Japan

- October 2015 – Prime-
Minister of Japan visited
Turkmenistan



High-Level Visits

- 2009, 2013 and 2015 - President of Turkmenistan visited Japan
- October 2015 – Prime-Minister of Japan visited Turkmenistan

- trade and economy
- political area
- energy
- transport
- gas and chemical industry
- science and technology
- culture

FUEL AND ENERGY COOPERATION PROJECTS:



- *"Kawasaki" - a plant in Ovdandcpc to produce gasoline from natural gas*
- *"TOYO Engineering" - a gas chemical complex in Kiyanly for production of polyethylene and polypropylene*
- *"Kawasaki" and "Sojitz" - a plant for the production of ammonia and carbamide in Mary*
- *"Mitsubishi" - carbamide production plant in Garabogaz*
- *"Mitsui" and "Sojitz" - a plant for the production of sulfuric acid in Turkmenabat*

Turkmenistan's chairmanship

Concept adopted
in 2014

Key elements

- Ensuring international and regional security
- Sustainable development
- Creating favorable conditions for effective trade and economic relations
- Active cultural exchange

6th Meeting of Ministers of Foreign Affairs Central Asia-Japan Dialogue

(1 May 2017)

- "Joint Statement" was signed.



- "Joint Statement" aimed at extensive cooperative relationship between Japan and Central Asian countries, promoting partnership in a wide range of fields such as countering terrorism and narcotics and other broad-ranging security issues, trade and investment, economic and social development, people-to-people and cultural exchanges

- "Roadmap for Regional Cooperation in Transport and Logistics" was adopted.

- "Roadmap for Regional Cooperation in Transport and Logistics," which consolidates cooperation in the transport and logistics field thus far, the direction of further cooperation, and specific projects, based on the belief that strengthening mutual connectivity inside and outside the region will contribute to regional development.



【The End】

Current state of relations and prospects for development of cooperation between Uzbekistan and Japan



Muzaffar MADRAKHIMOV
Head of Division, Asia and Pacific
Department, MOFA Uzbekistan

Political Relations

Diplomatic relations established on January 26, 1992

High level visits: To Japan - 1994, 2002, 2011 (President Islam Karimov). To Uzbekistan - 2006 (Prime-minister Junichiro Koizumi), 2015 (Prime-minister Shinzo Abe).

Inter-parliamentary ties: «Japan Parliamentary League of Friendship with Uzbekistan», «DPJ – Uzbekistan» and «Oliy Majlis of Uzbekistan – The National Diet of Japan».

Regular political consultations between the Ministries of Foreign Affairs since 2002.

Cooperation in **International Organizations**.

Cooperation in the framework of the **Central Asia plus Japan Dialogue**

Economic cooperation

- ▶ Uzbek-Japanese and Japanese-Uzbek **Committees on Economic Cooperation**, formed in 1994
- ▶ Active cooperation with **JICA**, **JETRO** and other organizations of Japan
- ▶ **Financial assistance** of Japan in implementing important infrastructure projects in economy and social sphere

Prospects for development of Uzbek-Japanese relations

- ▶ maintaining the regular exchange of high-level delegations;
- ▶ cooperation within the framework of the UN and other international organizations;
- ▶ further development of the Central Asia plus Japan Dialogue ;
- ▶ strengthening cooperation in financial sector, banking, trade and investment;
- ▶ development of bilateral cooperation in the fields of Education and Training;
- ▶ promoting cooperation in the sphere of tourism, including along the routes of the Great Silk Road.

【The End】

新聞 ネットじゃわからない

國際問題

キヤノングローバル戦略研究所研究主幹

宮家邦彦



題字・イラストレーション

信濃八太郎



連載
84

「中央アジア十日本」対話に参加して

今回の原稿は、不謹慎ながら、外務省7階の国際会議場で書き始めた。外務省とグローバル・フォーラム共催の「中央アジア+日本」対話のひな壇になぜか筆者はパネリストとして座っている。この東京対話は今年が10回目。中央アジア5カ国の代表と日米の中央アジア専門家参加し、同地域

との關係を展望する議論を行った。中央アジアは専門でない筆者だが、5カ国との国交は今年で25年目、会議は老若男女二百人近い参加者で大盛況だった。

まずは5つの国名から。筆者は数年前によく最も北に位置するカザフスタンから時計回りで「柿田棟（カキタウ）」と覚えた

カザフスタン キルギス
タジキスタン トルクメニ
スタン ウズベキスタン
「スタン」とは元々「国」
「地域」を意味するペルシ
ヤ語だ。パキスタンやアフ
ガニスタンと違うのは、も
ともとソ連邦の構成国だっ
たこと。ソ連崩壊後に独立
し、人口、資源、政治体制、
民族面ではバラバラだが、
長い社会主義独裁時代に世
俗化が進んだイスラム社会
という点で共通点が多い。
各国とも経済発展を最重
視し、日本からの投資への
期待が高く、会議も大半は
経済問題に費やされた。し
かし、筆者の発言内容はよ
り政治的なものだった。

●地域にはロシア、中国、
イスラムという現状変更勢
力があり、これら全てから
中央アジアは影響を受ける。

●各国は国内のイスラム、
特に一部の過激派や聖戦主
義者をどう見ているか。

●また中国の存在、一帯一
路政策をどう捉えているか。

これらへの5カ国の代表
の反応は実に興味深かった。

○中央アジアは過激主義と麻薬が蔓延るアフガニスタンを脅威と考えている。

○中央アジアにイスラム運動はあるが、イスラムという文化が国民の判断基準だとは必ずしも思わない。

○中国は米国の影響力低下で生まれた空白を埋めつつある。中国嫌いの感情がある一方で、中国は投資に積極的で柔軟性があり、ソフトパワーではロシアに勝る。こうした発言に、筆者は2つの点で懸念を覚えた。

第一は、中国の旺盛な進出ぶりが孕む多くの問題だが、今回は第二の論点、すなわち、各国の一般庶民はもちろん、政治指導者までがイスラムを「文化」と認識し、その政治性を過小評価しているらしいことの危険性を論じたい。

似たような話は数年前に訪れたキルギスでも聞いたことがある。「自分たちはイスラム教徒だが、キルギスは世俗主義の国だ。イスラムは『宗教』というより『文化』に近いのだ」とい

だが、中東が長い筆者はこれに強い違和感を持った。イスラムは「文化」ではなく、「神との契約」だからだ。イスラムの契約内容は、祈りの回数から女房の人数まで、森羅万象にわたり、対象は文化だけでなく、生活の全てに及んでいる。中央アジアのイスラムは長くソ連式社会主義の影響を受けたためか、表面的には世俗化したように見える。しかし、イスラム至上主義者や聖職主義者から見れば、こうした世俗化は宗教の墮落ではない。イスラムを「文化」と見る限り、コーランに忠実であるうとする過激派との闘いが不可避となる恐れがある。

2015年に安倍首相は5カ国を訪問して日本企業の進出を後押しした。同地域の独立、安定、繁栄は日本の国益である。中国の進出も気になるが、それ以上に、中央アジアの再イスラム化問題も大いに議論されて然るべきだ。

国交25年、対テロ・投資で協力＝日本・中央アジア有識者対話

日本と中央アジア5カ国の有識者対話、第10回「東京対話」が31日、東京都内の外務省で行われ、ソ連崩壊後の国交樹立25年を踏まえ、対話と協力を継続する立場で一致した。出席した川口順子元外相はテロ・麻薬対策の必要性を指摘し、「平和的発展が重要だ」と強調。中央アジア側からは日本の投資に期待が表明された。

日本は2004年、当時の川口外相の下、対話と協力の枠組み「中央アジアプラス日本対話」を設置し、東京対話はその一環として始まった。今年5月には、トルクメニスタンで外相会議を開き、「この枠組みでのさらなる関係強化」を確認した。



中央アジアは中ロ両国に挟まれた地政学上の要衝。中国のシルクロード経済圏構想「一帯一路」の陸路に当たる。対話の枠組みは安倍晋三政権の地球儀俯瞰（ふかん）外交の一つで、中国が影響力を強める地域で日本の存在感を高める狙いがある。（2017/08/31-14:35）

【政治記事一覧へ】 【アクセスランキング】



日本と中央アジア5カ国の有識者対話「東京対話」に出席した川口順子元外相（中央）＝31日午前、東京都千代田区霞が関

（時事ドットコムニュース、平成29年8月31日、14時35分配信）

第10回「中央アジア+日本」知的対話



2017年8月31日、東京の日本外務省において、第10回東京対話「中央アジア+日本」知的対話が中央アジアの共和国の代表者と世界的に著名な科学者の参加をもって開催されました。

日米のグローバルフォーラムとの協力で行われたこの行事には、国家機関と公的機関や日本の高等教育機関の中央アジアと日本に関する教授や専門家が参加されました。堀井学外交大臣政務官が

歓迎のスピーチをされ、中央アジア諸国と日本の外交関係樹立25周年に際して祝意を述べました。

「中央アジア+日本」対話の創設時に外務大臣を務めた川口博子明治大学国際総合研究所フェローは、中央アジア諸国と日本の外交関係樹立25周年に関する詳細な報告を行いました。

米国の著名な研究者であるフレデリック・スター・米外交政策評議会中央アジア・コーカサス研究所所長はスピーチの中で、中央アジアと東アジアの2000年もの歴史、及びシルクロードを通じた中央アジア地域と日本の関係について詳細に述べました。

「中央アジア+日本」対話の参加国の代表者は、メインテーマ「中央アジア諸国と日本関係の今と未来を展望する」に沿った報告を行いました。タジキスタン共和国を代表したのは、ボボソダ・クロムジョン・ジュラ・タジキスタン共和国大統領執行政務外交関係部長でした。

行事の終わりには、「中央アジア+日本」の枠組みの中における、さらなる協力の動向と見通しに関する意見交換が行われました。

“central asia-japan” dialogue

31 Aug 2017 12:35



(駐日タジキスタン大使館ホームページ(平成29年8月31日)より)



在日キルギス共和国大使館

8月11日・金

「中央アジア+日本」対話・第10回東京対話

「日・中央アジア関係の今と未来を展望する」開催のご案内

8月31日、外務省とグローバル・フォーラムの共催により「中央アジア+日本」対話・第10回東京対話「日・中央アジア関係の今と未来を展望する」の開催を予定しております。

今回の会合は、公開シンポジウム形式として、一般の方々にもご参加いただける催しとなっておりますので、皆様のご応募をお待ちしております。

今回の会合については、本年が日本と中央アジア各国との外交関係樹立25周年であることにかんがみ、各国と日本との関係の25年の軌跡を振り返りつつ、日本にとって中央アジアが身近な存在であることを再確認するとともに、日・中央アジア関係の未来の展望について意見交換を行います。

第10回東京対話（公開シンポジウム）「日・中央アジア関係の今と未来を展望する」

開催日時：2017年8月31日午前10時～

開催場所：外務省国際会議室北760号室（東京）

入場無料、要事前申込み（定員あり）、一般公開

共催：外務省、グローバル・フォーラム

言語：日本語・ロシア語（同時通訳）

登壇者（順不同）：中央アジア5か国からの発表者、フレデリック・スター氏（アメリカ外交政策評議会中央アジア・コーカサス研究所所長）、宇山智彦氏（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授）、宮家邦彦氏（キヤノングローバル戦略研究所 研究主幹）、古宮健一郎氏（澤田ホールディングス（株）取締役）、本間勝氏（欧州復興開発銀行（EBRD）東京駐在員事務所長）、相木俊宏（外務省中央アジア担当特別代表（大使））他

また、公開シンポジウムに続き、レセプションを開催いたします（公開シンポジウム参加者のみ対象。レセプションのみの参加は不可）。こちらにも事前申込み（定員あり）が必要です。早めの申込みをお待ちしています。

http://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/ca_c/page23_002146.html



「中央アジア+日本」対話・第10回東京対話

8月31日、外務省とグローバル・フォーラムの共催により「中央アジア+日本」対話・第10回東京対話「日・中央アジア関係の今と未来を展望する」の開催を予定しております。...

MOFA.GO.JP

いいね! 78件 シェア20件

（駐日キルギス大使館 Facebook（平成 29 年 8 月 11 日）より）



おいしい中央アジア協会

HOME

ABOUT US

BLOG

FOOD

JOIN US

CONTACT



中央アジア料理動画 ブロフ
August 24, 2017

おいしい中央アジア協会は、グローバルフォーラムと外務省と中央アジア料理動画を作成しました。炊飯器で簡単に作れるブロフの作り方をご紹介します。ブロフは日本の炊き込みご飯やヨーロップのピラフのような料理です。中央アジアでは、ブロフは大切な事には欠かせない料理で、大きな鉄鍋を使って調理します。

[動画を見る](#)



中央アジア料理動画 ディムラマ
August 24, 2017

おいしい中央アジア協会は、グローバルフォーラムと外務省と中央アジア料理動画を作成しました。中央アジア鶏肉じゃが「ディムラマ」を電子レンジであっという間に作る方法をご紹介します。味付けは塩をクミンだけでとってもシンプルです。

[動画を見る](#)



中央アジア料理動画 ラグマン
August 24, 2017

おいしい中央アジア協会は、グローバルフォーラムと外務省と中央アジア料理動画を作成しました。中国から中央アジアに伝わったラグマンという、うどんの作り方をご紹介します。ラグマンは、野菜がたっぷり入ったトマトソースをうどんにかけて食べる、中央アジアのソルフードです。

(おいしい中央アジア協会ホームページ (平成 29 年 8 月 24 日) より)

3. グローバル・フォーラムについて

[目的と歴史]

「グローバル・フォーラム」は、冷戦時代の 1982 年に西側内部（日米欧加 4 極）の非公式な意思疎通のパイプとして設立された「四極フォーラム(Quadrangular Forum)」の「日本会議 (Japan Chapter)」に淵源をもつ 知的国際交流組織である。冷戦の終焉にともない、1996 年に「四極フォーラム」がその活動を停止したので、「四極フォーラム日本会議」は、「四極フォーラム」から独立した独自の知的国際交流組織として、日本を中心に全世界的に放射線状の対話を組織、展開してゆくことになり、名称も「グローバル・フォーラム(Global Forum of Japan)」と改めた。

[組織]

「グローバル・フォーラム」は、民間、非営利、非党派、独立の立場に立つ、会員制の任意団体である。目的に賛同する「経済人」、「政治家」、「有識者」が「世話人」あるいは「メンバー」となって、その活動を支えている。事務局は公益財団法人日本国際フォーラム内に置く。現在の組織は、大河原良雄相談役、伊藤憲一代表世話人、渡辺蘭常任世話人のほか、石川洋、豊田章一郎、茂木友三郎の 3「経済人世話人」を含む 10 名の「経済人メンバー」、浅尾慶一郎、柿沢未途、小池百合子、谷垣禎一の 4「政治家」世話人を含む 16 名の「政治家メンバー」、そして伊藤剛、神谷万丈、六鹿茂夫の 3「有識者世話人」を含む 66 名の「有識者メンバー」から構成される。なお、事務局長は高畑洋平である。

[活動]

- (1) ホームページ上に設置された e-論壇「議論百出」における「公開討論活動」
- (2) 月例の「国際政経懇話会」、「外交円卓懇談会」の開催
- (3) 『会報』、ホームページ、メールマガジン、出版刊行等の「広報啓発活動」
- (4) 全世界のカウンターパートを相手に、政策志向の知的対話を毎年 3～4 回実施する「国際対話活動」。なお、その最近の開催実績は以下のとおり。

開催年月	テーマ	共催団体
2017年8月 6月 3月 2月	「中央アジア+日本」対話「日・中央アジア関係の今と未来を展望する」 日・ASEAN対話「変容するアジア太平洋地域秩序と日・ASEAN協力」 日米対話「トランプ政権時代の日米同盟：岐路か継続か」 日中対話「少子高齢化時代の日中協力のあり方」	外務省 シンガポール南洋理工大学、ベトナム国家大学 米国防大学国家戦略研究所 上海外国語大学日本文化経済学院、上海社会科学院日本研究センター、復旦大学国際関係と公共事務学院
2016年12月 11月 9月 7月 3月	国際シンポジウム「仲裁裁判所判決「後」をめぐって：アジアの海の今後」 世界との対話「ウクライナ危機後の欧州・アジア太平洋秩序と日本」 日中韓対話「世界の中の日中韓関係」 日・アジア太平洋対話「21世紀の国際秩序とアジアの海」 日米対話「激動の世界と進化する日米同盟」	明治大学国際政策研究所、明治大学国際総合研究所 米国大西洋協議会、ウクライナ世界政策研究所 日中韓三国協力事務局 明治大学、西シドニー大学 米国防大学国家戦略研究所
2015年12月 9月 7月 3月 3月 2月	日・東アジア対話「東アジア地域協力の新地平」 日中対話「未来志向の関係構築に向けて」 第 2 回日・GUAM対話「激動する世界における日・GUAM関係」 中央アジア・シンポジウム「未来を見据えた中央アジアの今」 日米対話「新ガイドライン時代の日米同盟」 日・東アジア対話「我々は何をなすべきか：アジア諸国間の信頼のために」	シンガポール国立大学東アジア研究所、インドネシア大学 中国現代国際関係研究院 GUAM：民主主義と経済発展のための機構 外務省、東京大学、The Japan Times 米国防大学国家戦略研究所 浙江大学公共管理学院 アルバート・デル・ロサリオ戦略国際問題研究所

[事務局] [住 所] 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-17-12-1301
 [TEL] 03-3584-2190 [FAX] 03-3589-5120
 [E-mail] gfj@gfj.jp [URL] <http://www.gfj.jp>



グローバル・フォーラム
The Global Forum of Japan (GFJ)

〒107-0052 東京都港区赤坂 2-17-12-1301

2-17-12-1301, Akasaka, Minato-ku, Tokyo, 107-0052, Japan

TEL : +81- (0) 3-3584-2193

FAX : +81- (0) 3-3505-4406

E-mail : gfj@gfj.jp

URL : <http://www.gfj.jp>